

# 周船寺遺跡群3

2000

福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第655集

# 周船寺遺跡群 3

2000

福岡市教育委員会

## 序

玄界灘に面して広がる福岡市には、古くから大陸との玄関口として発展し、市内には数多くの遺跡が残されています。私たちはこれらの遺跡を後世に伝えていくことを願い、さまざまな形で遺跡の保護に取り組んでおります。

その一方で、最近の都市の発展により新しい開発事業が数多く手がけられ、そのため重要な遺跡が破壊され、失われつつあるという厳しい現実があります。福岡市教育委員会ではこれらの遺跡についてはあらかじめ事前に発掘調査を行い、先人の足跡を後世に残せるよう、その記録保存に努めております。

本書は西区周船寺遺跡群第11次調査の成果を報告するものです。

本書が文化財保護の一助となるとともに、学術研究の資料として御活用いただけましたら幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで費用負担など多くのご協力を頂いた山田勝生氏をはじめとする関係者の方々に対し、心より謝意を表します。

平成12年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 西 憲一郎

## 例　言

1. 本書は共同住宅建設に先だって、福岡市教育委員会が1998年2月3日から4月21日にかけて行なった周船寺遺跡群第11次調査の調査報告書である。
2. 本書に掲載した遺構実測図の作成は大塚紀宜、山田ヤス子が行ない、青木美香、八尋恵美、早水康子の協力を得た。
3. 本書に掲載した遺物実測図の作成は大塚が行なった。
4. 本書に掲載した遺構及び遺物写真の撮影は大塚が行なった。
5. 本書に掲載した挿図の製図は大塚が行なった。
6. 本書で用いた方位は磁北で、真北から6°21' 西偏する。
7. 本書で使用した遺構の呼称は、堅穴住居をSC、甕棺墓をST、土坑をSK、溝をSDと略号化している。
8. 遺構、遺物番号は基本的に通し番号にしている。
9. 本書に関わる記録・遺物などの資料は福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
10. 本書の執筆・編集は大塚が行なった。

遺跡調査番号	9768		遺跡略号	S SJ-11	
調査地地番	福岡市西区大字千里字ミドリ440-1他				
開発面積	2364.42 m <sup>2</sup>	調査対象面積	812.68 m <sup>2</sup>	調査実施面積	812.68 m <sup>2</sup>
調査期間	1998.2.3~1998.4.21				

## 本文目次

第1章 はじめに .....	1
第2章 遺跡の立地と環境 .....	2
第3章 調査の記録 .....	3
第1節 A区の調査 .....	3
1. 調査概要 .....	3
2. 遺構・遺物 .....	3
1) 壺棺墓 .....	3
2) 積穴住居 .....	8
3) 土坑 .....	9
4) 溝状遺構 .....	15
第2節 B区の調査 .....	17
1. 調査概要 .....	17
2. 遺構・遺物 .....	17
1) 積穴住居 .....	17
2) 土坑 .....	17
3) 溝状遺構 .....	22
第3節 繩文土器 .....	26
第4節 出土石器 .....	27
第4章 周船寺遺跡11次調査総括 .....	36

## 挿図目次

Fig. 1	周船寺遺跡群位置図 (縮尺 1/25,000)	2
Fig. 2	調査区位置図 (縮尺 1/400)	4
Fig. 3	A区遺構配置図 (縮尺 1/150)	5
Fig. 4	甕棺墓遺構実測図 (縮尺 1/20)	6
Fig. 5	甕棺実測図 1 (縮尺 1/6)	7
Fig. 6	甕棺実測図 2 (縮尺 1/4)	8
Fig. 7	ST-027内出土遺物実測図 (縮尺 1/4)	8
Fig. 8	A区堅穴住居実測図 (縮尺 1/60)	9
Fig. 9	A区土坑実測図 1 (縮尺 1/40)	10
Fig. 10	A区土坑実測図 2 (縮尺 1/40)	11
Fig. 11	A区溝状遺構実測図 (縮尺 1/60)	12
Fig. 12	SD-38出土遺物実測図 1 (縮尺 1/4)	13
Fig. 13	SD-38出土遺物実測図 2 (縮尺 1/4)	14
Fig. 14	A区出土遺物実測図 (縮尺 1/4)	15
Fig. 15	B区遺構配置図 (縮尺 1/150)	18
Fig. 16	B区堅穴住居実測図 (縮尺 1/60)	19
Fig. 17	B区土坑実測図 (縮尺 1/40)	20
Fig. 18	B区溝状遺構実測図 (縮尺 1/60)	21
Fig. 19	B区出土遺物実測図 1 (縮尺 1/4)	23
Fig. 20	B区出土遺物実測図 2 (縮尺 1/4・1/8)	25
Fig. 21	B区出土遺物実測図 3 (縮尺 1/4)	26
Fig. 22	A区出土绳文土器実測図 1 (縮尺 1/3)	28
Fig. 23	A区出土绳文土器実測図 2 (縮尺 1/3)	29
Fig. 24	A区出土绳文土器実測図 3 (縮尺 1/3)	30
Fig. 25	A区出土绳文土器実測図 4 (縮尺 1/3)	31
Fig. 26	出土石器実測図 1 (縮尺 2/3)	32
Fig. 27	出土石器実測図 2 (縮尺 2/3)	33
Fig. 28	出土石器実測図 3 (縮尺 1/2)	34
Fig. 29	出土石器実測図 4 (縮尺 1/2)	35

## 図版目次

図版 1	1 A区西半部分 (北から)
	2 A区東半部分 (北から)
	3 ST-026 (北から)
図版 2	1 ST-027 (東から)
	2 ST-032 (西から)
	3 ST-050 (南から)
図版 3	1 SC-002 (西から)
	2 SK-012 (北西から)
	3 SK-031 (南東から)
図版 4	1 SD-036遺物出土状況 (南から)
	2 SD-038遺物出土状況 (北から)
	3 B区全景 (東から)
図版 5	1 B区全景 (北西から)
	2 SC-058 (北から)
	3 SC-080 (北から)
図版 6	1 SK-072 (北西から)
	2 SD-051遺物出土状況 (北東から)
	3 SD-063遺物出土状況 (南東から)
図版 7	1 SD-064遺物出土状況 (東から)
	2 SD-069 (北から)
	3 SD-071遺物出土状況 (南から)
図版 8	出土遺物

# 第1章 はじめに

## 1. 調査に至る経過

平成9年（1997年）3月21日、山田勝生氏より、福岡市西区大字千里字ミドリ439-1他地内における共同住宅建築にともなう埋蔵文化財事前審査願が申請された。これをうけて埋蔵文化財課では申請地が周船寺遺跡群の範囲内に属することから同年3月28日に試掘調査を実施した。その結果同地内で弥生時代の溝、土坑を検出し、遺構が申請地全体に遺存していることを確認した。この結果をもとに埋蔵文化財課では関係者と協議を重ねた結果、建物の建築予定部分については建物基礎が遺構面に影響を与えることからこの部分について発掘調査による記録保存を図ることとし、平成10年（1998年）2月から4月まで約3ヶ月間発掘調査を実施した。

調査は2月3日より重機による表土除去を開始し、2月5日より作業員による遺構検出、掘削を開始し、4月21日に調査区を埋め戻し、終了した。

発掘調査の実施にあたっては、地権者の山田勝生氏をはじめ関係者の方々には多大な御理解と御協力を頂いた。ここに記して感謝いたします。

## 2. 発掘調査の組織

調査委託 山田 勝生

調査主体 福岡市教育委員会

調査総括 埋蔵文化財課 課長 荒巻輝勝（平成9年度）柳田純孝（平成10年度）山崎紘男（現任）

調査第一係長 二宮忠司（前任）山口譲治（現任）

庶務担当 埋蔵文化財課 内野保基（平成9年度）

文化財整備課 木原淳二（平成10年度）宮川英彦（平成11年度）

事前審査 埋蔵文化財課 松村道博 池田祐司

調査担当 埋蔵文化財課調査第一係 大塚紀宜

調査作業 青木 美香 石橋マサ子 井上紀世子 井上ムツ子 岩見 敏子 大鶴 好子

海津 宏子 金子ヨシ子 川岡 涼子 川島ツキエ 菊地 昭一 菊地 栄子

倉光アヤ子 倉光 京子 倉光 政彦 小柳 和子 稲所 通泰 高橋 茂子

田中 栄 鶴田喜美枝 鶴田 佑子 長島 光儀 中園登美子 西鶴 彰子

早水 康子 平川 英子 細川 友喜 満田 雅子 三好 道子 八尋 恵美

山尾タマエ 山口タツエ 山田ヤス子 和田裕美子

整理作業 橋口 勝子 橋口三恵子 山下留美子 青柳智香子 海津 敦子 山田久美子

今塙屋毅行

## 第2章 遺跡の立地と環境

周船寺遺跡群は行政区画上、福岡県福岡市西区周船寺・千里にまたがって所在する。地形的には糸島平野の東部、高祖山の北西麓に位置し、瑞梅寺川が形成した沖積平野上にあたる。

糸島平野は背振・雷山山系から流れ出す瑞梅寺川、雷山川の両河川とその他の小河川による開析・堆積作用によって形成された低地、低段丘によって構成される。行政上は福岡市と前原市に二分されるが、本来はこれらの低地、段丘には一帯に縄文時代より集落が構成され、三雲（前原市）、千里シビナ（周船寺遺跡群範囲内）の両遺跡で住居跡、埋甕が検出されている。弥生時代には平野中央部の三雲・井原丘陵で住居、墳墓が多数検出されており、「伊都国」の中心部であったと推定されている。平野東部では飯氏遺跡群で甕棺墓群や集落跡が検出されており、甕棺墓群は前期後半から後期にかけて営まれ、後期中頃の甕棺墓から雲雷文内行花文鏡が出土している。集落は中期後半を主とするもので、糸島平野東部での弥生時代集落の拠点が飯氏遺跡群付近に存在していたことを示すものである。

古墳時代になると、引き継ぎ三雲・井原丘陵で集落が営まれる他、飯氏遺跡群でも丘陵上に集落がみられる。また糸島平野東部から今宿平野にかけて前方後円墳が築造されるようになる。年代的には若八幡古墳が4世紀中頃、丸隈山古墳が5世紀初頭、今宿大塚古墳が6世紀前半とみられている。また平野中部では三雲・井原地区の端山古墳が4世紀中頃、築山古墳が4世紀後半とみられる。

周船寺遺跡群のこれまでの調査は、1979年の千里シビナ遺跡としての調査以来2000年3月現在まで13次を数える調査が行われている。本報告のなされた調査が少なく、断片的な内容しか提示できないが、第1次調査で竪穴住居址、溝、埋甕が検出され、縄文晩期～弥生前期とみられる。6次調査では弥生前期後半の甕棺墓、弥生中期の土坑、掘立柱建物、古墳時代の溝、中世の掘立柱建物と縄文晩期の包含層を検出している。8次調査では弥生前期後半の甕棺墓、弥生中期の掘立柱建物と土坑、溝を検出する。9次調査では南西から北東へ延びる2条の柱穴列を確認している。10次調査では縄文後期の包含層と弥生時代前期の溝を確認している。



Fig. 1 周船寺遺跡群位置図 (縮尺 1/25,000)  
図中アミ部分が遺跡群の範囲。点は第11次調査地点位置

## 第3章 調査の記録

今回の調査地点は、周船寺遺跡群全体の南側で、第6次調査の北隣になる。標高は10m前後で、弥生時代中期の遺構面は現地表面から-50cm~-70cmの黄褐色~暗褐色シルト層上面で検出する。調査区を建物予定部分に限定したため調査区が南北2ヶ所に分かれ、南側をA区、北側をB区とする。

### 第1節 A区の調査

#### 1. 調査概要

A区は東西33.5m、南北13.5m前後の長方形区画を調査区として設定し、調査面積は452.25m<sup>2</sup>である。基本層序は、上層の客土による整地層の下に旧田面の灰色土、黃色粘土を挟んで暗褐色シルト質土面（マンガン分が多く沈殿する）で弥生時代遺構面となる。その下層は灰色砂質土を多く含む層となる。暗褐色土は遺物包含層で縄文晩期の遺物を含む。弥生中期の遺構覆土は暗灰褐色~暗黒褐色の粘質土となるものが多い。また遺構面を切り込んで、上層からの搅乱が多い。

A区では比較的高い密度で弥生時代中期の遺構を検出している。検出した遺構の種類は、竪穴住居址、壺棺墓、祭祀土坑、溝状遺構、柱穴である。壺棺墓は計4基出土し、良好に保存する2基は弥生時代中期中頃の大型壺棺である。祭祀土坑は、長径1m短径50cm程度の小型の楕円形の遺構と、長辺3m短辺1mの大型の遺構があり、いずれも遺構内に土器が小片の状態で多量に検出される。溝状遺構は4本検出しているが、どれも南東から北西方向に延びている。

出土石器についてはA・B区とも繩文、弥生の各時代を通じて巻の後半で一括して報告する。

#### 2. 遺構・遺物

##### 1) 壺棺墓

ST-026 (Fig. 4) 調査区南西側で検出された壺棺墓とみられる遺構。壺棺自体は原位置をほとんど留めていないが、土器の出土状況から壺棺墓の痕跡が伺われ、壺棺墓と認める。墓壙の大きさは長さ106cm、幅88cmで、北側に搅乱坑があり本来の墓壙の深さは南側床面の26cm前後が適当であろう。平面形は隅丸長方形で、北側が左右に張り出す。土器は墓壙南側で出土し、北側では搅乱のため出土土器はない。また出土状況からは壺棺の埋置形態の推測は困難である。

出土遺物 (Fig. 6) 墓壙内から2個体分の土器が出土している。いずれも壺形土器で合口式の小児棺の可能性が高い。5は如意状口縁で口唇部下部に刻目を施す。口縁部下部に沈線を2条施す。外面はナデと見られる。6は断面三角形口縁で、口縁下に刻目を施し、口縁下部に断面三角形の突帯を1条貼付する。内外面ともに風化著しい。

ST-027 (Fig. 4) 調査区南西側で検出された壺棺墓。壺棺主軸を北東~南西方向に向かって、上巣が南西側を向く合口壺棺で、壺格の埋置形態は上巣が下巣に収まる、いわゆる呑口式である。埋置角はほぼ水平である。墓壙は壺棺周囲に比較的大きな不整形の土壙を掘り、中央部分に一段低い墓壙を掘って壺棺を埋設している。壺棺の東側にあるピット内から器台が出土している。遺構の切り合いから壺棺の埋没より時間的に後であるが、壺棺墓の供獻として埋められた可能性もある。

出土遺物 (Fig. 5・7) 1は鉢形土器。口縁は外側に長く突き出し、わずかに下垂する。口縁下に断面三角形突帯を1条貼付する。底部はわずかに上げ底。体部は内外面ともナデ。底部外側付近に指圧痕が残る。口縁、突帯付近はヨコナデ。2は壺形土器。口縁は上巣と同様外側に突出し、口縁上面はやや内傾する。口縁下に2条の断面三角形突帯を貼付する。副部が張り、下膨れ状の形態を呈する。

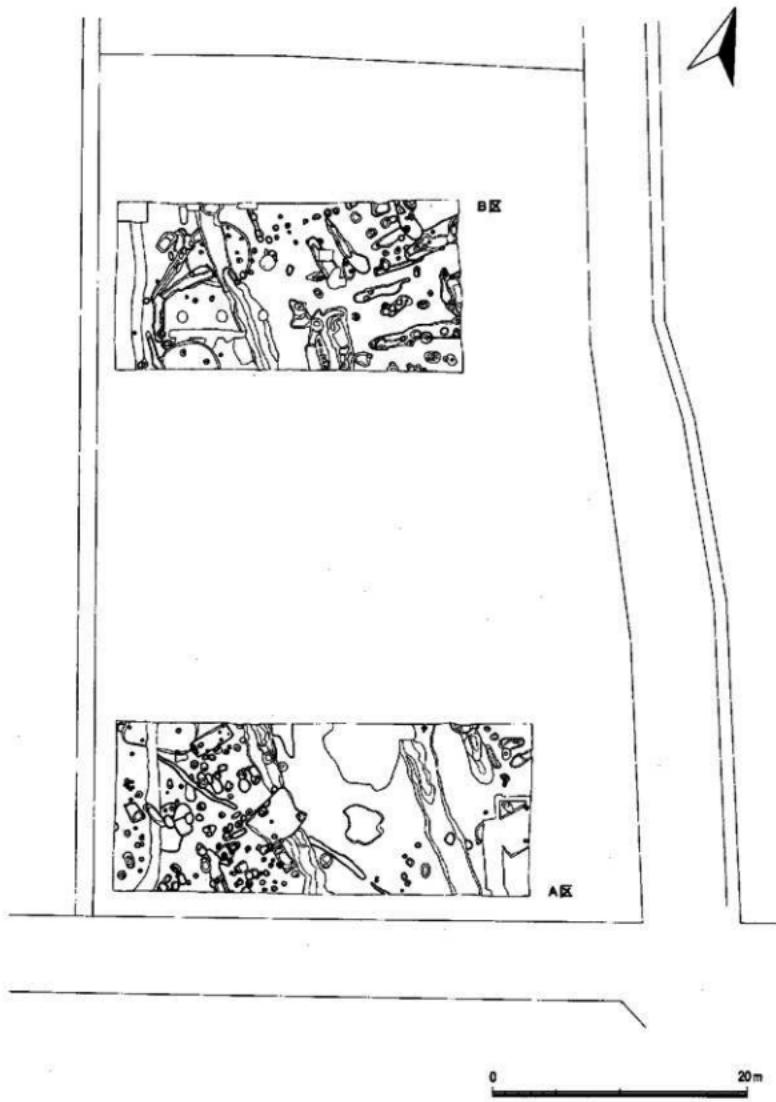


Fig. 2 調査区位置図 (縮尺 1/400)

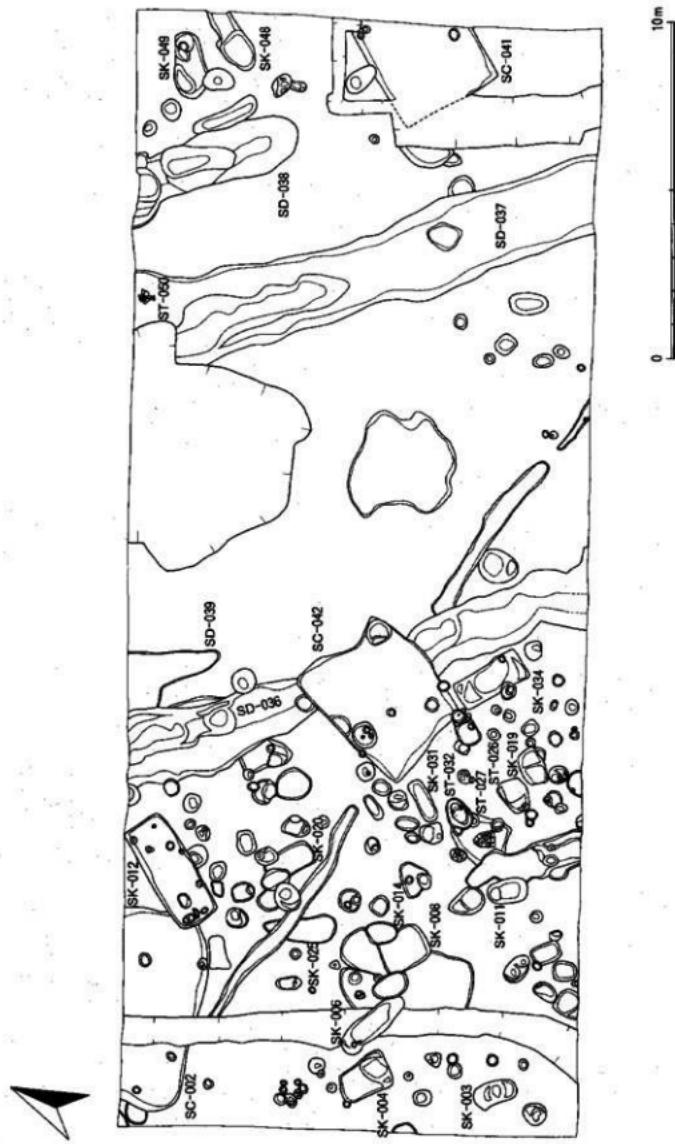


Fig. 3 A区選擇配置図 (縮尺 1/150)

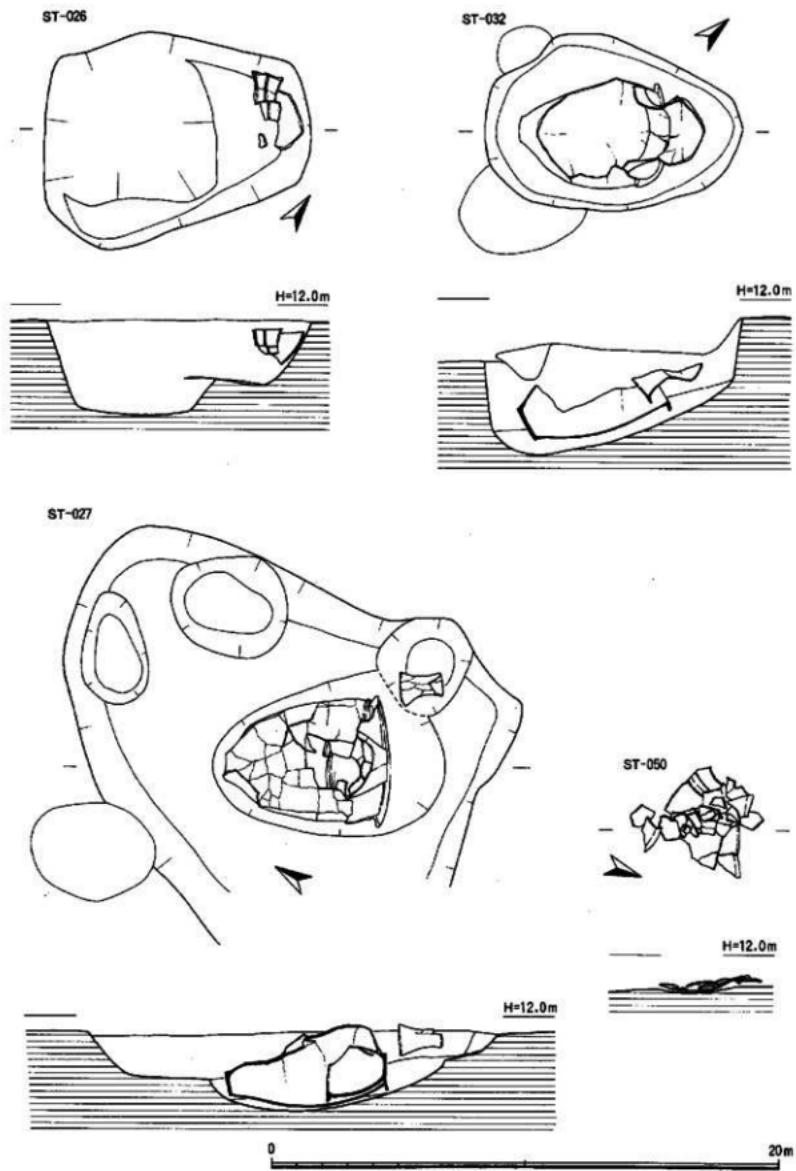


Fig. 4 台柏墓遺構測量圖 (縮尺 1/20)

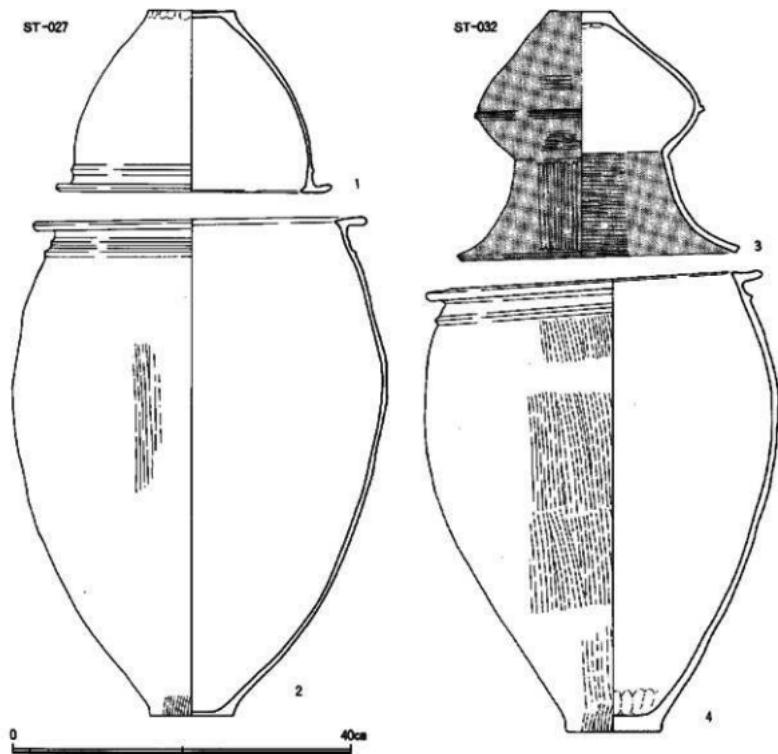


Fig. 5 壱棺実測図 1 (縮尺 1/6)

胴部外面は縦方向ハケ目痕が残る。内面はナデ。口縁、突帯付近は横ナデ。

**ST-032 (Fig. 4)** 調査区西側で検出された壺棺墓で、ST-027に隣接する。壺棺上軸を北東—南西方向に向け、上窓が北東側を向く合口壺棺で、検出時は上窓が下窓側にずり落ちているが本来の壺棺の埋置形態は接口式であったとみられる。埋置角は20°前後で、若干の傾斜をもつ。墓壙は梢円形で竪穴形を呈する。壁は床面から直に立ち上がり、墓構内に横口や段は見られない。

**出土遺物 (Fig. 5)** 3は壺形土器。頸部から口縁部にかけて外方に広がる。胴部は算盤玉形をなし、胴部最大径付近にコ字形突帯を1条貼付する。胴部に対し、頸部の割合が長くなる。頸部外面は縦方向ヘラミガキ、内面は横方向ヘラミガキ。胴部は外面に横方向のミガキ痕跡が残る。外面に丹塗痕あり。4は壺形土器。口縁部は外側へ突出し、口縁上面は平坦でやや内湾する。口縁部の内側への張り出しはない。口縁下部に断面三角形突帯を1条貼付する。胴部は外へ張り、底部は平底とする。胴部外面は縦方向ハケ目、内面はナデ。口縁部、突帯部付近は横ナデ。

**ST-050 (Fig. 4)** 調査区北側で検出された壺棺墓で、検出面で押し潰された状態で検出されたため、墓壙形態や埋葬形態は明らかでないが、残存する破片の状況から見て、埋葬形態は横置に近い形であったと考えられる。

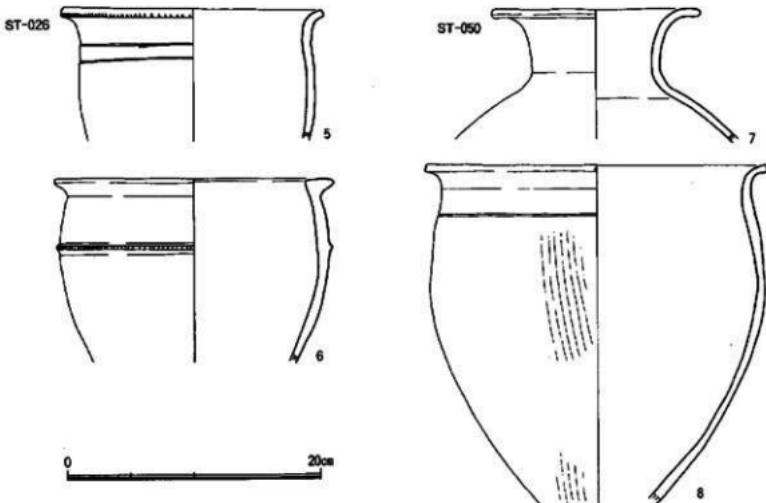


Fig. 6 壺棺実測図2 (縮尺1/4)

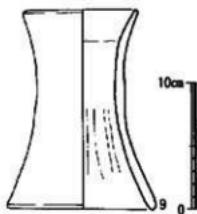


Fig. 7 ST-027内出土  
遺物実測図 (縮尺1/4)

**出土遺物 (Fig. 6)** 7は壺形土器の口縁部付近。頸部が直立し口縁部が短く外反する。頸部と胴部の境界は屈曲し、胴部は丸く張り出す形になると見られる。内外面とも器壁の風化、剥落が著しく、器面調整は不明。8は壺形土器で底部を欠損する。口縁部は如意状で端部は短く外反する。口縁下部に1条の沈線を施す。胴部外面に縱方向のハケ目痕が残る。内面、口縁部付近は横ナデ。

## 2) 穴穴住居

**SC-002 (Fig. 8)** 調査区北西側で検出された穴穴住居。北半分は調査区外に及び、中央部を排水溝に切られる。東西幅6.0mで平面形は方形とみられる。四隅は丸みを帯び、南西隅は外側に膨らむ。削平を大きく受けしており、床面までの遺存する深さは15cm前後にとどまる。壁はやや開き気味に立ち上がり、床面はほぼ平坦で壁際、床面にピットを検出したが、住居に伴う主柱穴の確定は困難である。弥生土器がビニール小袋1袋分出土するが、いずれも小片で磨滅著しい。

**SC-041 (Fig. 8)** 調査区東端で検出された方形の穴穴住居。東側は調査区外に及び、西側は搅乱で壊される。南北幅3.26mで、他の住居と比較して小型である。削平を受けていると見られ、遺構の遺存状態は悪く、検出時の深さは15cm前後にとどまる。床面、壁際でピットを検出したが、主柱穴の確定は困難である。弥生土器がビニール1袋分出土する。いずれも小片で風化進む。

**SC-042 (Fig. 8)** 調査区中央部で検出された穴穴住居で、SD-036を切る。平面形は長方形だが削平が著しく、遺構東側は遺構の原形を留めていない。長軸幅4.28m、短軸幅3.34m前後で、検出時の深さは10cm前後である。床面に凹凸が見られ、北側にわずかに傾斜する。床面でピットを検出したが

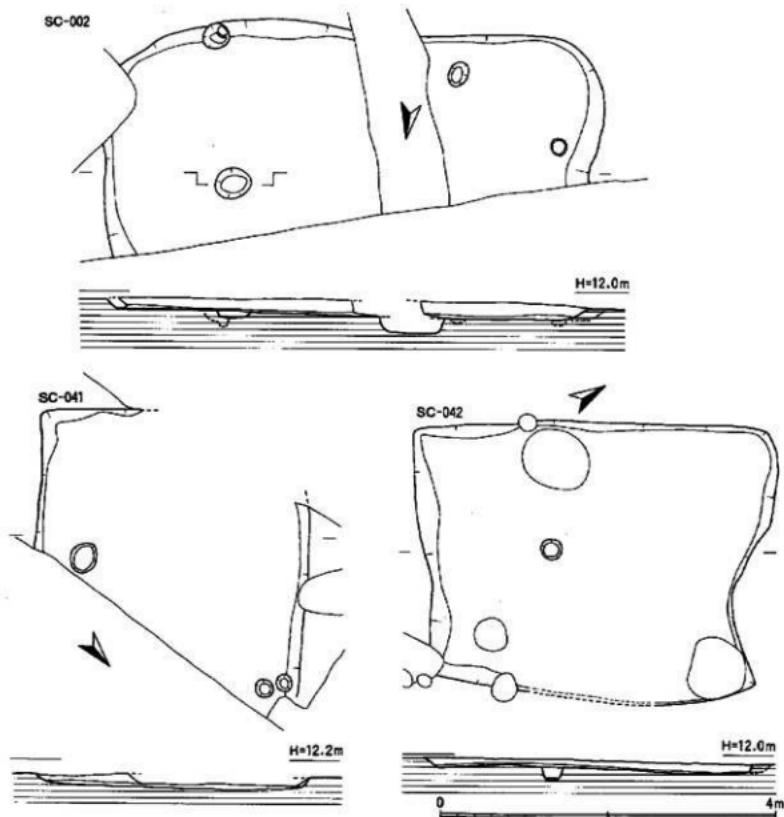


Fig. 8 A区竖穴住居実測図 (縮尺 1/60)

住居に伴う主柱穴の確定は困難である。遺構内から弥生土器を中心とした遺物が出土する。ほとんどが弥生中期のもので一部SD-036のものと見られる弥生中期初頭の土器も混入する。

### 3) 土坑

土坑については遺物を多く出土しているもの、土壙墓の可能性があるものをここで取り上げる。

**SK-003 (Fig. 9)** 調査区西側で検出された土坑。長軸を北西—南東に向ける。床面中央部が特に深く、両端に段をもつ。壁の立ち上がりは比較的緩い。遺構内から弥生土器がビニール小袋1袋分出土する。中期前半の遺物と見られるが、いずれも小片で風化進む。

**SK-004 (Fig. 9)** 調査区西側で検出された方形の土坑。床面はほぼ平坦で、南側に一段低い掘込みがある。遺構内から弥生土器が出土するが、風化が進み、器種、時期が判別できるものはない。

**SK-006 (Fig. 9)** 調査区西側で検出された椭円形の土坑で、長軸は北西—南東方向。遺構壁は両

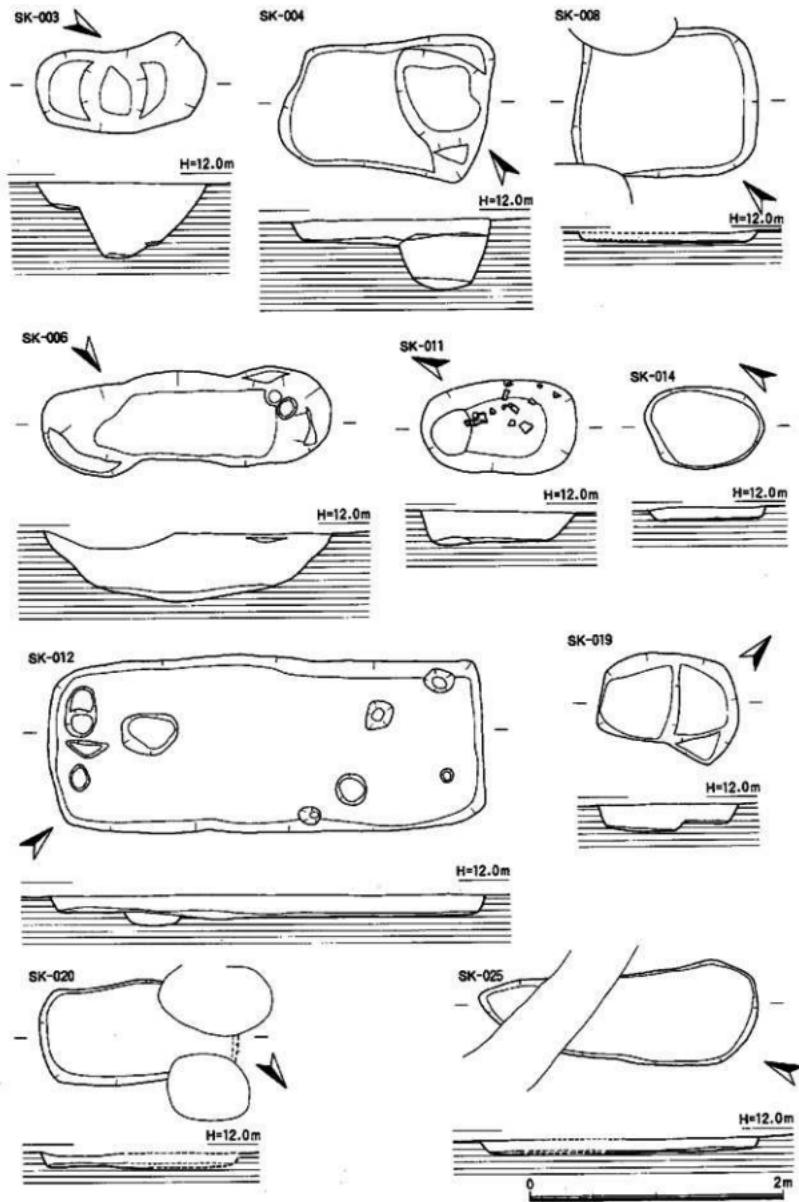


Fig. 9 A区土坑実測図 1 (縮尺 1/40)

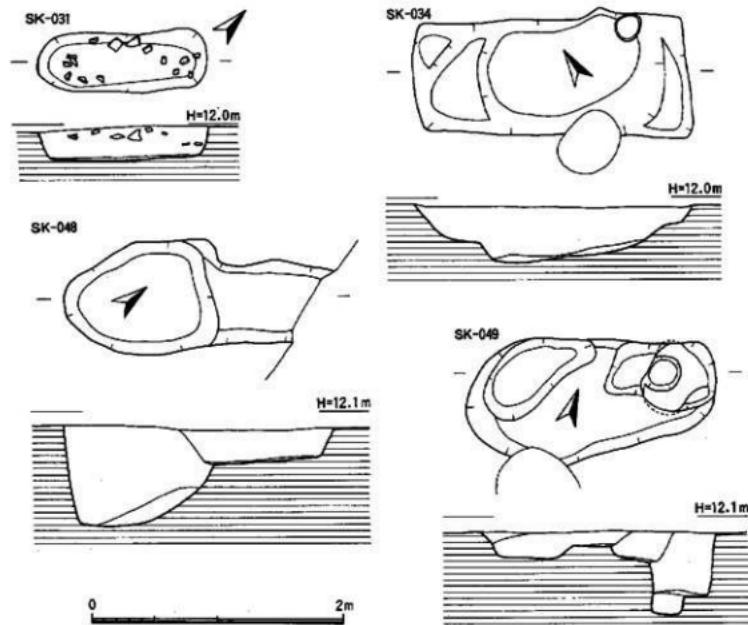


Fig.10 A区土坑実測図 2 (縮尺 1/40)

端部分で緩く開き気味に立ち上がり、両側壁は直に立ち上がる。床面は緩く凹む。遺構内から弥生土器がビニール袋1袋分出土する。遺物の大半は弥生中期中頃～後半に属するとみられる。

**SK-008 (Fig. 9)** 調査区西側で検出した方形の土坑。遺存状態が悪く、皿状に遺存する。床面は平面で、南側にわずかに傾斜する。出土遺物はない。

**SK-011 (Fig. 9)** 調査区西側で検出された土坑で、平面形は楕円形を呈する。床面は平坦で、北側に緩く傾斜する。土構内からの遺物はほとんど検出面付近からの出土となる。遺物はいずれも小片で風化、磨滅の進んだものが多い。

**SK-012 (Fig. 9)** 調査区北側で検出された土坑で、平面形が長方形の豊穴状を呈する。床面は平坦で、床面上にピットが確認できる。建物をなす遺構の可能性もある。遺構内から弥生土器がビニール小袋1袋分出土する。いずれも小片で風化進む。

**SK-019 (Fig. 9)** 調査区南側で検出された土坑で、平面形は長方形を呈する。隣接するST-026と土坑の主軸方向や規模が近似し、同時期の土壙墓の可能性がある。遺構内から弥生土器がビニール小袋1袋分出土するが、いずれも小片で図示できるものはない。

**SK-020 (Fig. 9)** 調査区西側で検出された土坑で、北側は柱穴に切られている。平面形は長方形とみられ、床面は平面になる。形態から土壙墓の可能性が大きい。遺構内から弥生土器がビニール小袋1袋分出土する。いずれも風化が進み、磨滅する。

**SK-025 (Fig. 9)** 調査区西側で検出された土坑で中央部を溝に横切られている。平面形は楕円形

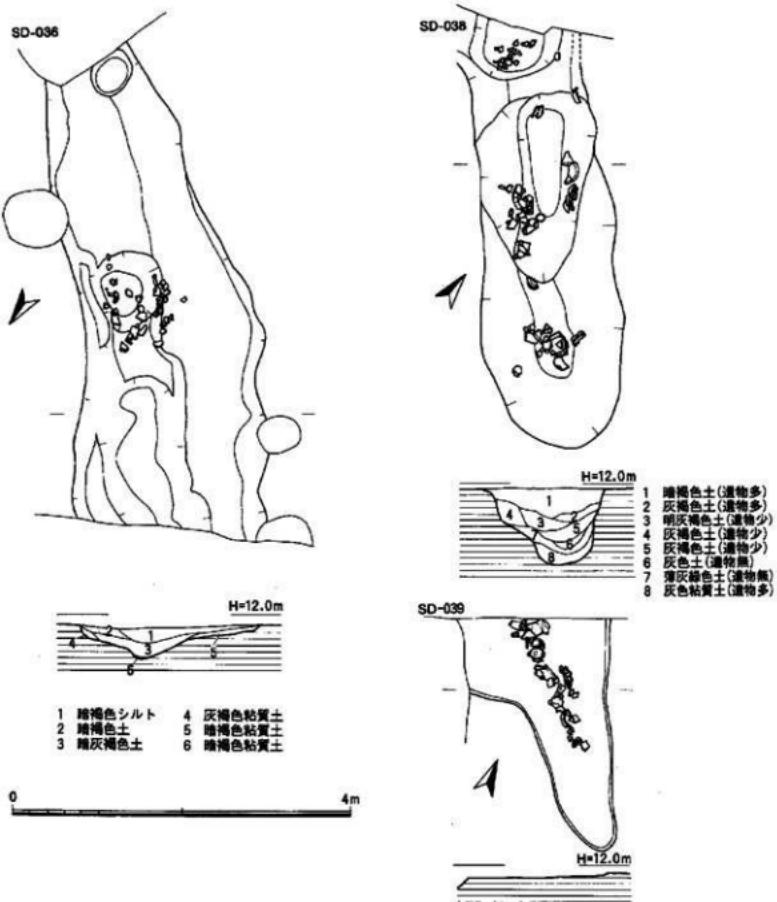


Fig.11 A区溝状遺構実測図 (縮尺 1/60)

に近い形で北側が尖り、南が広くなる。平面形状から見て土壤墓の可能性が考えられる。弥生土器を中心とする遺物が出土しているが、いずれも小片で磨滅しており、図示可能なものはない。

SK-031 (Fig.10) 調査区中央部で検出された土坑で、平面形は橢円形を呈する。壁は床から比較的垂直に近く立ち、床面は平坦になる。出土遺物は覆土の上層に集中する。

出土遺物 (Fig.14) 出土土器は小片が多い。48は壺口縁部で鋤先状口縁を呈する。

SK-034 (Fig.10) 調査区中央部で検出された土坑で、平面形は長方形を呈する。土坑中央部が一段低くなり、両端に高い段がつく。床面は凹凸が目立つ。出土遺物はみられない。

SK-048 (Fig.10) 調査区東側で検出された土坑で、一部調査区外に及んで溝状になる。西側で大きく落ち込む。溝部分と土坑部分の覆土の違いは検出されなかった。

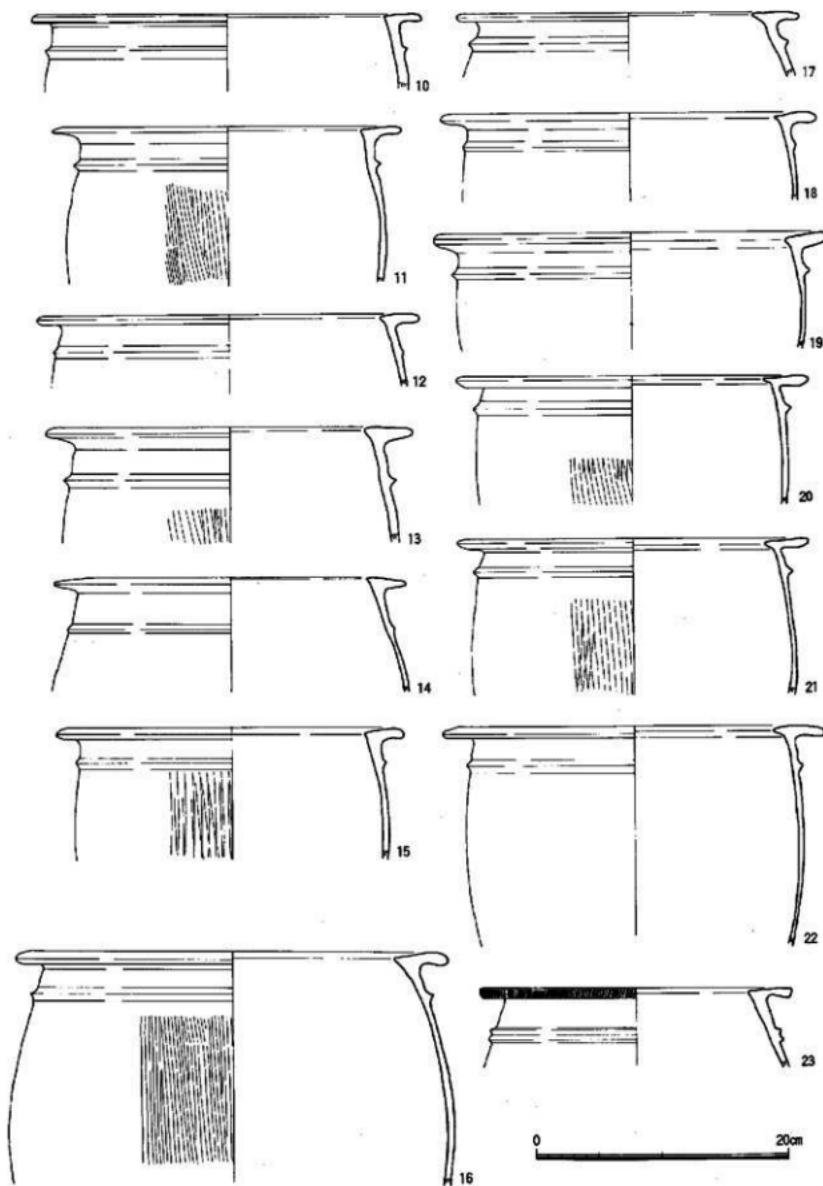


Fig. 12 SD-38出土遺物実測図 1 (縮尺 1/4)

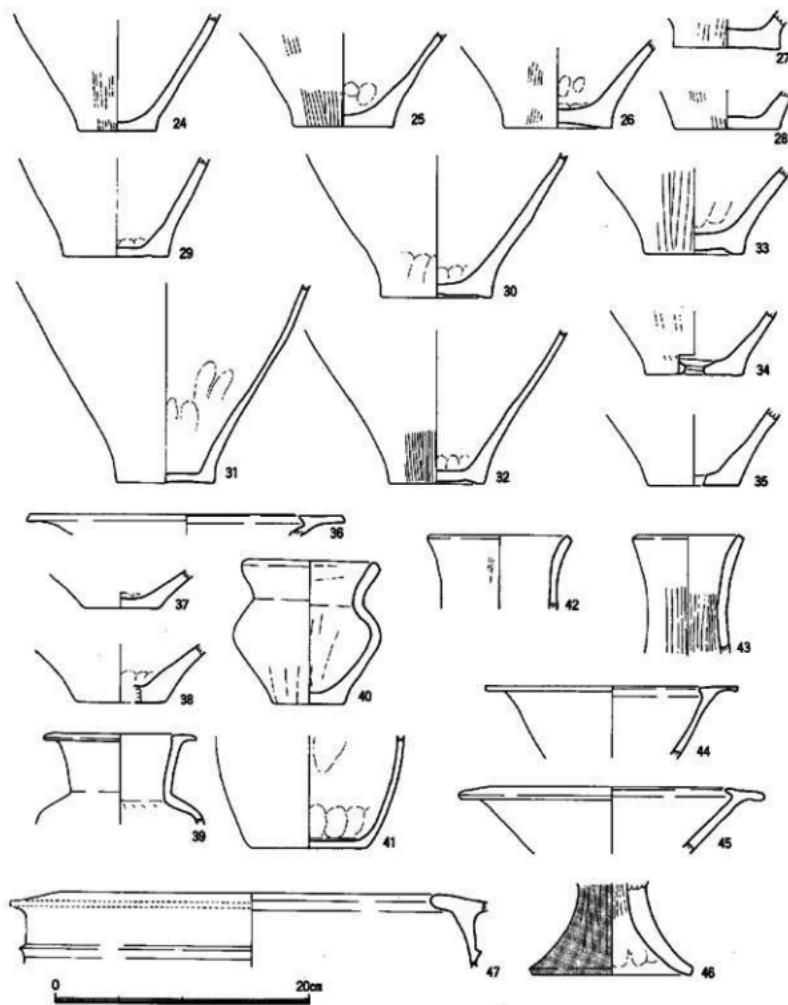


Fig.13 SD-38出土遺物実測図2 (縮尺1/4)

出土遺物 (Fig.14) 出土した土器は弥生中期の土器を中心とする。小片が多く、風化が進む。57、58は壺口縁部で、57は口縁内側の張り出しが少なく、58も突出が小さい。

SK-049 (Fig.10) 調査区東側で検出された土坑で、平面形は橢円形を呈する。遺構内に凹凸が目立ち、特に東側で落ち込む。遺構内から弥生土器がビニール袋1袋分出土する。器種的には壺、高杯等を確認するが、いずれも小片で図示するに至らない。時期は弥生中期中頃とみられる。

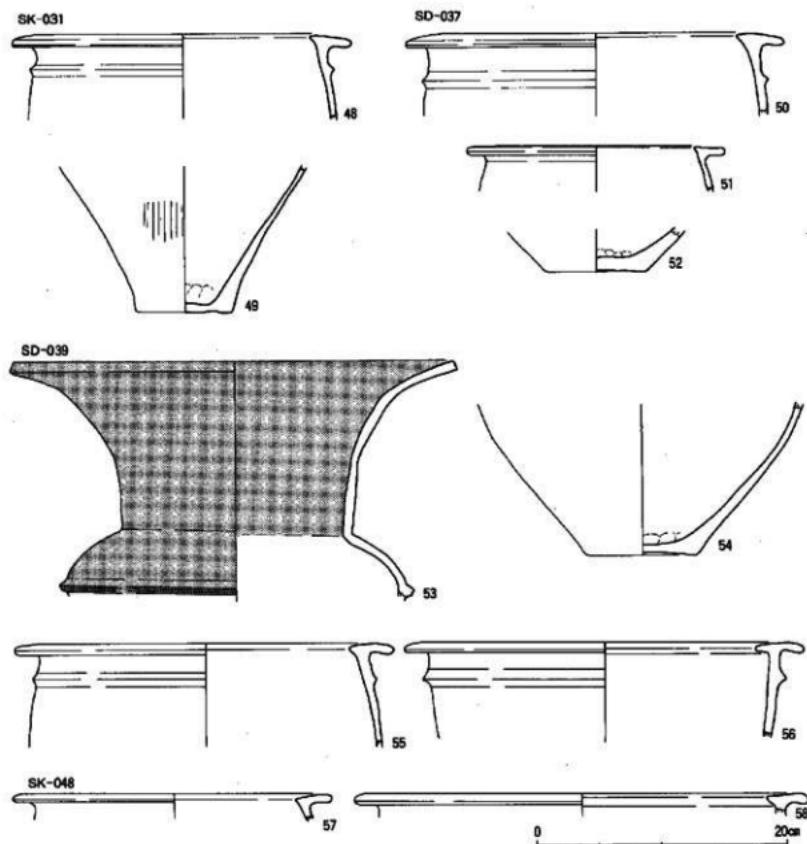


Fig. 14 A区出土遺物実測図 (縮尺 1/4)

#### 4) 溝状遺構

SD-036 (Fig.11) 調査区中央部で検出された溝で、調査区を南北に横切る形で検出される。溝の方向は北西 - 南東方向に向き、直線的に延びる。溝の断面形はU字形をなし、溝床面は凹凸が目立ち、部分的に二段掘り状になる箇所もある。遺物は検出部分全体で検出されたが、特に検出部分の北側の一段低くなる部分で比較的大きな破片が集中する。

出土遺物 (Fig.14) 出土土器の多くは細片化し磨滅する。49は壺底部。平底で、底部に接合痕が明瞭に残る。この他に城ノ越式壺底部の他、須玖I・II式の壺口縁部、高杯脚部等も出土する。

SD-037 調査区中央部で検出された溝で、調査区を南北に横切る形で検出される。溝の方向は北西 - 南東方向に向き、直線的に延びる。深さは40cm前後を測り、断面形は浅いU字形を呈する。検出部分北側で一部二段掘り状になる。

**出土遺物 (Fig.14)** 遺物は検出部分全体で出土している。50は壺口縁部で、口縁上面はやや外傾する。51は小型壺口縁部と見られる。52は壺底部。平底で、胴部にかけて大きく開く。

**SD-038 (Fig.11)** 調査区北東側で検出された溝で、北西—南東方向に向き、北側部分は調査区外に延びる。断面はU字形で、他の溝に比べて深く、最も深い部分で検出面から1m前後を測る。溝の南側端部は丸くなり、緩く上がっていく。溝の周囲の壁はやや急に立つ。検出範囲全体から遺物が出土している。上層で比較的細かい破片が流れこみ、最下層で大破片の土器片が出土する。

**出土遺物 (Fig.12・13)** 遺物量はパンケース3箱相当にのぼるが、完形のものは少ない。10~23は壺形土器口縁部。10~16は口縁部の内側への張り出しがなく、口縁端部は外側に伸びる。13、14は口縁が断面三角形に近い形のものである。外面は綫方向ハケ目調整のものが多く、表面が風化して不鮮明なものもある。17~19は口縁内側の張り出しがわずかに見られるもので、17、18は口縁が外側に水平に伸び、端部がわずかに垂下する。19はやや太目の口縁が上方に伸びる。外面はいずれも風化して調整痕は不鮮明。20~22は口縁部が外側に細長く伸び、内側への張り出しが明瞭なもの。20、21は口縁上面がわずかに内傾し、21は口縁がわずかに垂下する。外面は綫方向ハケ目だが、22は風化著しく調整不明。23は口縁部が外に伸び、端部を太く作って口唇部に刻目を施す。口縁下に断面M字形突帯を一条貼付する。胴部はナデ、口縁部と突帯部付近は横ナデ。

24~35は壺形土器底部。24、25は底部外面は完全な平底で、内底は丸みをもって胴部につづく。外面はいずれも綫方向ハケ目。26は内底は丸くなり、やや上げ底になる。27、28は残りは悪いが、内底が平坦面をなし、外底が完全に平らなもの。27は底厚がやや厚い。29~31は内底が平坦で、胴部と底部の境界の粘土縫合目が明瞭に残るもの。外面に指圧痕が残るが、風化が進み、表面調整は不明。32、33は底部外側が高台状になるもの。器表に胴部と底部の境界の粘土縫合目が明瞭に残る。34、35は壺底部に穿孔が残るもの。器形的には24~25の部類に入る。

36は壺形土器口縁部。彫形口縁で頸部は外側に開く。口縁部以下が欠けており器形の推測は困難である。37、38は壺形土器底部。39~41は小型壺。39は頸部で屈曲し、直立て彫形口縁をなす。頸部屈曲部付近の内面に板ナデ痕が連続して残る。40は直線的に張った胴部に短く太い頸部が付く。内外面とも板ナデ痕が残る。41は壺形土器底部の可能性もある。外面は風化進み調整不明、内面に指圧痕が多数残る。SD-038全体で壺の出土量と比較して壺の出土量が圧倒的に低い。42、43は器台。いずれも上端は横ナデで面を作る。外面は綫ハケ。43は内面に絞り痕が残る。

44~46は高杯。44は杯部破片で、口縁上面が水平で口縁部内側の張り出しが小さい。45は彫形口縁で口縁上面が外傾し、杯体部は外側に大きく広がる。46は脚部で、脚端部は大きさは開かない。外面は綫方向の粗いハケ目。内面は指圧痕が残り、上部に絞り痕が形成される。

47は壺棺口縁部とみられる。口径28.6cmで、小型の部類になる。口縁上面が外傾し、内側に張り出した部分は太く丸く仕上げる。口縁直下に断面三角形突帯を貼付する。

**SD-039 (Fig.11)** 調査区北側で検出された溝状造構で、西側をSD-036に切られる。深さは5cm前後で遺存状況は悪い。造構中央部付近に土器が集中して出土する。

**出土遺物 (Fig.14)** 53は壺形土器で胴部下半を欠く。頸部から口縁部にかけて外側に大きく開く。胴部は口縁に対して小さく、胴部最大傾付近に断面M字突帯を貼付する。外面は剥落が著しく、調整不明。54は壺形土器の胴下半部。底部は上げ底気味で、胴部はやや丸みをもって立ち上がる。内外面ともナデ。55、56は壺形土器口縁部。55は彫形口縁で内側への張り出しが小さい。56は口縁の内側への張り出しが大きく、胴部は直線的に狭まり、鉢形土器の可能性もある。

## 第2節 B区の調査

### 1. 調査概要

B区はA区の北側に設定する。東西約28m、南北約13mの長方形区画で、面積は360.43m<sup>2</sup>である。表土から遺構面までの基本相序はA区とはほぼ同一である。遺構面は暗褐色シルト質で、調査区東側は特に土色が暗くなり、遺構検出が困難になる。

B区で検出された遺構は竪穴住居、土坑、溝、ピットで、遺構の時期は弥生時代中期初頭から中期中頃にかけてである。また中期初頭とみられる遺構は調査区の西側に集中する。住居址はいずれも円形。他の遺構に切られていることから遺構群の初期のものである。溝状遺構は北西-南東方向とそれにはほぼ直行する2方向に分けられる。北西-南東方向の溝は深いもので約1mで、断面はU字形状や緩い半月型を呈し、弥生中期初頭～後半の遺物を大量に含む。北東-南西方向の溝は幅が狭く、長さも短い。これらの溝状遺構の中には土器を多量に出土する祭祀土坑も含まれている。

B区ではA区で遺構面の下層で確認されている縄文晩期の遺物を含む包含層は検出されていない。

### 2. 遺構・遺物

#### 1) 竪穴住居

SC-058 (Fig.16) 調査区南西側で検出された竪穴住居で、南半分は調査区外にかかる。平面形は円形で、床面はほぼ平坦面をなし、壁は床からやや開き気味に立ち上がる。床面上に柱穴を2穴確認しており、住居に伴う主柱穴と見られる。柱穴の深さは床面から50～60cmと深く掘削されている。検出時での床面までの深さは15～20cmを測り、かなりの削平を受けているものとみられる。炉跡等は調査した範囲からは検出されておらず、南側部分にあるものと推定できる。土層からみた覆土の堆積状況は流れ込みによる自然堆積の様相を示す。遺構内からの出土遺物は見られない。

SC-080 (Fig.16) 調査区西側で検出された竪穴住居で、遺構中央部から西側にかけて他の溝に切られているが、遺構床面までは影響を受けっていない。平面形は円形で、直径5.1～5.2mを測り、ほぼ正円といえる。検出時の床面までの深さは15～20cmでかなりの削平を受けているものとみられる。床面はほぼ平坦面で、壁は床から緩く開いて立ち上がる。床面上に主柱穴と見られるピット9穴を検出しており、柱穴の深さは25～30cmである。また住居中央部分で炭化物を多く含む不整形の掘り込みを検出しておらず、住居に伴う炉跡とみられる。

出土遺物 (Fig.21) 出土遺物は弥生土器を中心とする。大部分が細片で磨滅が進む。100は甕口縁部。逆L字形に外側に突き出し、口縁上面がやや下垂する。口縁内側への張り出しが未発達で、ほとんど突出しない。内外面とも風化により調整は不鮮明。101は甕底部で、成形時の凹みがみられる。

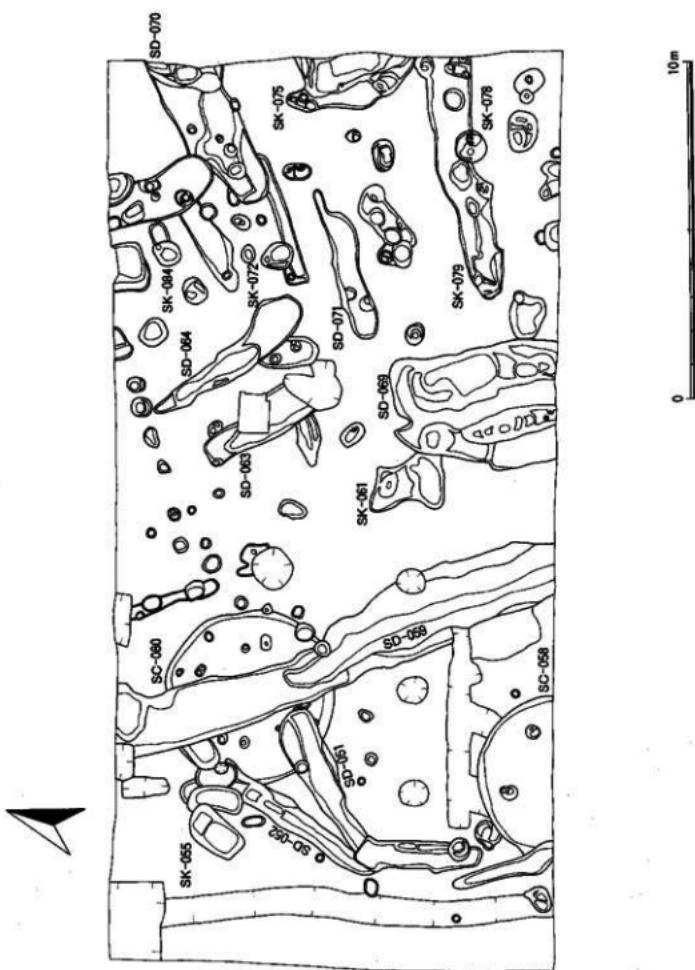
#### 2) 土坑

A区と同様、B区でも土坑については形態が特徴的なもの、遺物を多量に出土しているもの、土壤墓の可能性があるものを取り上げる。

SK-055 (Fig.17) 調査区西側で検出された土坑。平面形態は台形に近い形で、南側短辺付近は直線的に掘込まれ、北側はゆるく膨らむ。北側に段が付く。床面は北側に傾斜する。出土遺物は確認できない。遺構形態からみて土壤墓の可能性も考えられる。

SK-057 (Fig.17) 調査区西側で検出された土坑で、住居SC-080を切り、東側をSD-059に切られる。遺存部分では平面形は半梢円形で、幅80cm、深さ35cm前後を測る。平面形は主軸に対して左右対称で、

Fig.15 B区勘探剖面图 (编尺 1/150)



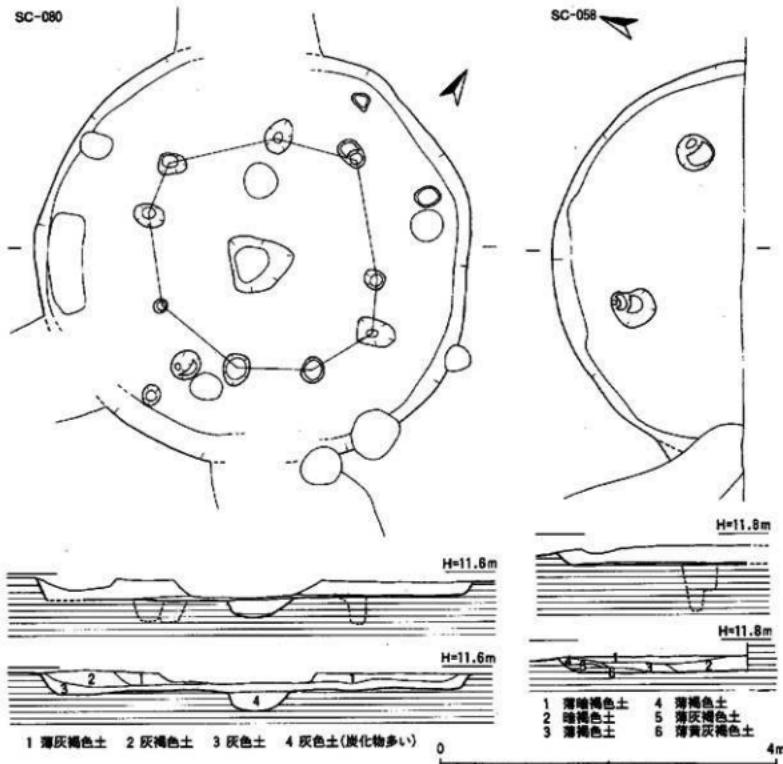


Fig.16 B区堅穴住居実測図 (縮尺 1/60)

床面はやや南側により、平坦面を形成する。周壁は床面から直線的に開いて立ち上がる。遺構形状から見て土壙墓の可能性が高いと見られる。遺構内からの出土遺物は確認できない。

SK-061 (Fig.18) 調査区中央で検出された土坑で、SD-069に切られる。平面形は不整形で中央部がくびれる。南側が北側よりも一段深く掘込まれ、遺物は南側部分から出土する。深さは浅く、北側で5cm、南側で20cm弱の深さである。出土遺物は弥生中期中頃の遺物を中心とする。

SK-072 (Fig.17) 調査区東側で検出された土坑で、SD-074を切る。平面形は梢円形で北西側が尖る。遺構の大きさは長さ100cm、幅82cm、深さ55cm前後。北東側、南北側に段がつく。床面は東側がやや上がり気味ではほぼ平面である。周壁は床面から直線的に立ち上がり、かなりの傾斜をもつ。

出土遺物 (Fig.20) 遺構内からは甕形土器1点が破片で出土しており、復元の結果ほぼ完形となった。これ以外の個体が遺構内から出土していないため、単独の土器を埋納した供獻遺構か、甕棺墓の類の可能性もある。84は口縁形態が逆L字形で、口縁上面がやや外傾する。口縁内側への張り出しが見られない。口縁下に低い断面三角形突帯が貼付される。胴部は張り出して底部に続き、底部付近での締まりは弱い。外面は縱方向ハケ目痕が残り、内面はナデで、内底に3段の指圧痕が残る。

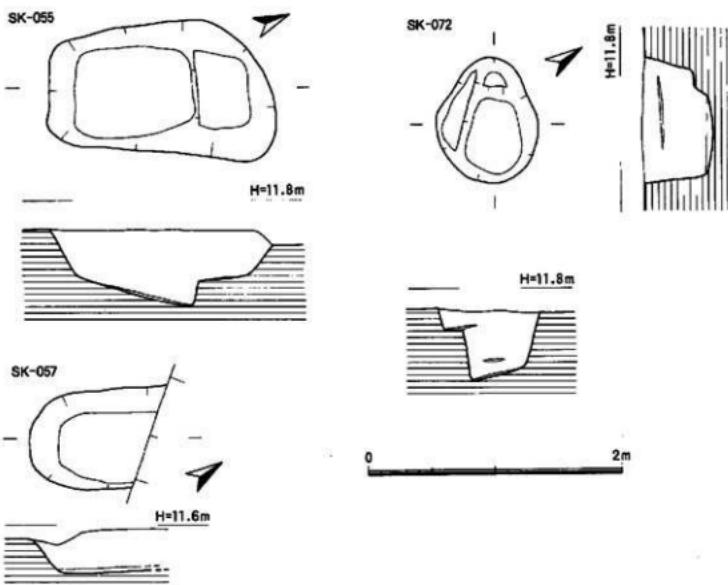


Fig.17 B区土坑実測図（縮尺1/40）

SK-075 調査区東端で検出された不整形土坑。東側は調査区外に及び、検出した範囲では東西幅1.7m、南北長3.6m、深さ55cm前後を測る。壁、床面ともに凹凸が多く、複雑な形態を示す。

出土遺物 (Fig.20) パンケース2箱分の上器が出土している。大きめの破片が多く、壺、壺、高杯、器台を確認する。図示したのは以下の6点である。85は壺形土器で、完形に復元できる。口縁部は外側に太く伸びる。口縁下部に断面三角形突帯を1条貼付する。胴部は張って卵型をなし、底部付近で細く縮まる。底部は平底で内底は丸みを帯びる。胴部外面は継方向ハケ目、内面はナデで、底部付近に指圧痕が残る。口縁部、突帯付近は横ナデ。86、87は壺口縁部。86は口縁は外側に長く突出し、口縁上面は水平で横ナデによる細かい凹凸が見られる。口縁部下に断面三角形突帯を貼付する。胴部外面は継方向ハケ目、内面はナデ。口縁部と突帯部付近は横ナデ。87は外側に短く伸びた口縁部が先端で下に垂れる。口縁上面はやや丸みを帯びる。口縁内側への張り出しそなく、内面は胴部から直線的に連続する。胴部は内外面ともナデ、口縁部と突帯付近は横ナデ。88は壺下半部。胴部は底部付近で細く縮まる。底部は平底で、内底は丸みを帯びる。外面は継方向ハケ目、内面はナデで、指圧痕が各部分に残る。89は壺口縁部で壺棺の可能性がある。口縁部は内側に突出し、ナデで丸く作る。上面は横ナデで平滑にし、やや外傾する。口縁外端部は横ナデで面を作る。器壁は厚さ1.2cmで、厚く作る。外口径40.6cmで、立岩式壺棺破片とみられる。90は壺形土器口縁部で大型のものである。口縁部は動形で内外両側に張り出し、口縁両端部に面を作り、口縁上面は平面になる。頭部は外側に開くと思われる。外口径56.8cmで、この個体も壺棺に使用された可能性が高い。

SK-078 調査区西側で検出された土坑で、SD-079を切る。平面形態は円形で、床面に凹凸が目立つ。土坑北側に段をもち、床面にピットが3穴掘られる。遺構の性格、用途などは不明。

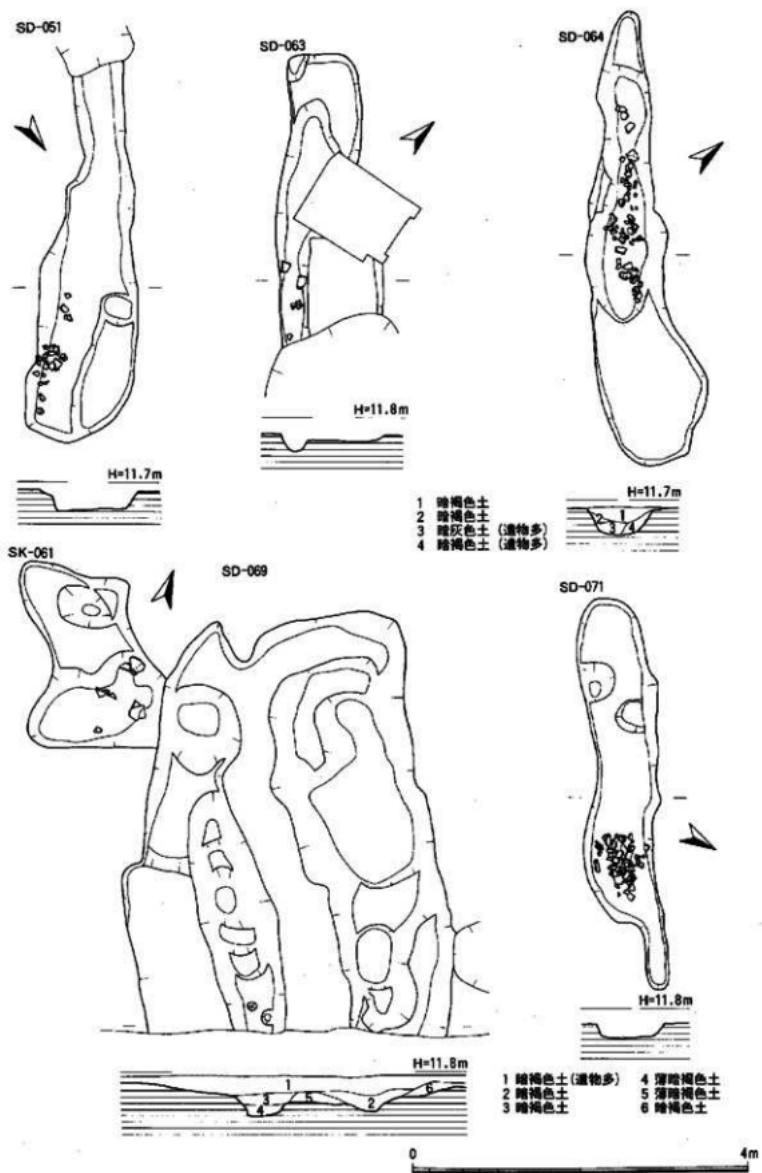


Fig. 18 B区溝状遺構実測図 (縮尺 1/60)

**出土遺物 (Fig.20)** 91は壺形土器。口縁部は鋭角に屈曲して外側に長く突出する。口縁下部に断面三角形突帯を貼付する。92は壺底部。平底で、内底面に平坦面が見られる。

**SK-084** 調査区北東側で検出した土坑で、西側を切られる。遺存部分は幅50cm、深さ40cm前後を測り、平面形は隅丸長方形を呈する。床面はほぼ平坦で、周壁は床面からやや開き気味に立ち上がる。形態からみて、土壙墓の可能性がある。

**出土遺物 (Fig.21)** 出土遺物は弥生土器を出す。102、103は壺底部。いずれも平底形。内外面とも風化が著しい。他の破片は小片で、量も少ない。

### 3) 溝状遺構

**SD-051 (Fig.18)** 調査区西側で検出された溝状遺構で、北東一南西方向に向く。南側が細く、北側がやや膨らみ、北側は二段掘り状になる。床面は平坦で、遺構断面は逆台形になる。遺物は北側で集中して出土する。検出時の深さは40cm前後で、東側が深くなる。

**出土遺物 (Fig.19)** 弥生土器を中心に出土する。細片多く、風化が進んだものが多い。59は壺形土器口縁部。口縁形は断面三角形を呈する。内外面ともに風化著しく、調整不明。60は壺底部。上げ底で外底部が細く張り出す。

**SD-052** 調査区西側で検出した溝で、SD-051の北側に北東一南西方向に延びるが、両者の方向は異なる。溝幅はほぼ一定で60~70cm前後を測る。深さは20~40cmで、断面形はU字形を呈する。北端で土坑に切られており、南側でSD-051を切る。

**出土遺物 (Fig.19)** 61、62はいずれも壺形土器底部。61は上げ底で底部は厚く、外底部は小さく横に張り出す。外面に成形時の指圧痕が残る。62も上げ底で、底部は大きく外に広がる。外面に成形時の指圧痕が残り、括れ部分は指オサエで成形したことを示す。

**SD-059** 調査区西側を南北に貫く溝状遺構で、住居SC-080を切る。溝の方向は北西一南東方向で、A区で見られる溝状遺構と同じ方向を向く。溝幅は1.4~2.3mで、深さは30cm前後である。断面形は浅いU字形で、溝内部に凹凸は見られず、床、壁とも平面的な形になる。

**出土遺物 (Fig.19)** 63は壺形土器上半部。口縁部は外側に短く突き出し、口縁上面は内傾する。口縁下に突帯は見られず、内外面ともに風化著しく調整不明。64は胴部が張らず、鉢形土器の可能性もある。口縁部は口縁部は外側に短く突き出し、口縁上面は水平になる。口縁下に断面三角形突帯を貼付するが小さい。65は壺底部で、厚底で外底端部は細く縮まり、外側への開きは小さい。

**SD-063 (Fig.18)** 調査区中央で検出された溝状遺構で、北西一南東方向に向く。南側は搅乱によって削られ、中央部も構造物によって壊される。溝中央部西側で一段低くなる二段掘り構造で、遺物は一段下がった部分で出土している。検出時の深さは北側段部分で8cm、西側床面で30cm、東側段部分で5cmを測る。遺構内から弥生土器が出土している。細片が多いが、確認された壺形土器口縁部からみて、弥生中期前半と見られる。図示した遺物はない。

**SD-064 (Fig.18)** 調査区中央で検出された溝状遺構で、北西一南東方向に向く。SD-063と1m前後の間隔で同一方向を向く。全長5.4m、最大幅1.4mを測る。溝中央部が両端より一段低くなる二段掘り構造で、最も深い部分で深さ30cmを測る。遺物は一段下がった中央部で多く検出されている。

**出土遺物 (Fig.19)** 66、67は壺形土器口縁部。66は厚い口縁が外側に伸び、口縁内側への突出も大きく、T字形を呈する。口縁下に断面三角形突帯を貼付する。内外面とも風化著しく調整不明。67は逆L字形口縁が外側に伸び、口縁上面がやや垂下する。68は壺底部。外底面はほぼ平底で、底部と胴部の粘土接合に伴う凹凸が残る。内底面は平坦面を作る。69は壺形土器の破片を再利用しようとした

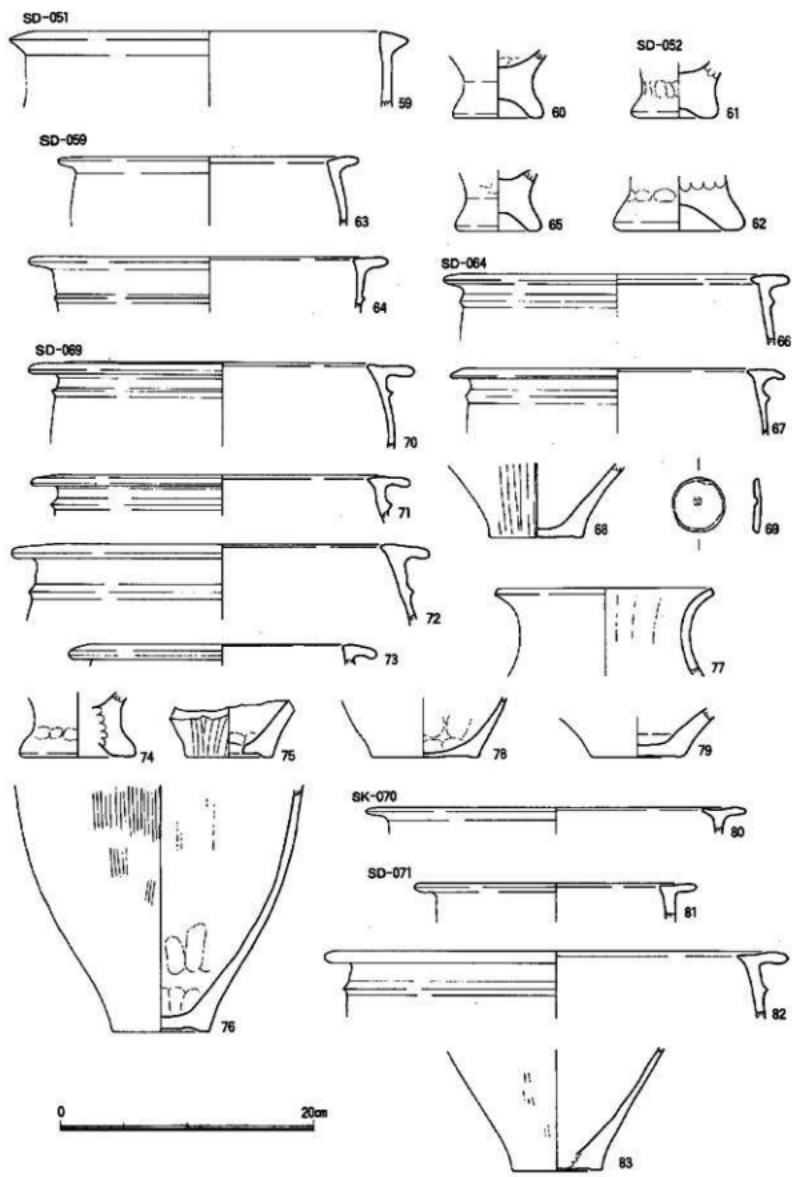


Fig. 19 B区出土遺物実測図1 (縮尺1/4)

と見られる土製の紡錘車未製品。周囲を人為的に削って丸く成形している。全体にカーブをもっており、裏面には縦ハケの痕跡が残る。中央の穿孔は貫通していない。

SD-069 (Fig.18) 調査区中央南側で検出された溝状遺構とみられる遺構。南側は調査区外に延びており北側部分のみ検出する。溝内部にさらに溝状部分が2条ある構造になり、その他の凹凸も加えて複雑な構造になる。西側の溝状部分は最も深い部分で検出面からの深さが1.1mあり、最深部を中心に複数の段を構成している。東側の溝状部分は西側に比べて広く、床面は凹凸があり組んだ複雑な形態をなす。最も深い部分で検出面から50cm前後である。

出土遺物 (Fig.19) 出土遺物は総量でパンケース1箱相当。磨滅した破片が少なく、ほぼ全部が弥生中期の範疇に収まる。70~73は壺形土器口縁部。70、71は外側に口縁が突き出し、口縁内側への張り出しがない。口縁上面は平坦で、横ナデの凹凸が上面に残る。72は外側に突き出した口縁が下方にやや垂下する。口縁内側への張り出しが見られない。73はやや小型の壺で、口縁は外側に短く突き出し、やや垂下する。時期的に古いものとみられる。74は壺底部で、厚底の底部が底端部で外反し、括れて胴部へつながる。75は底部破片を再利用した製品とみられる。口縁部は打ち欠いて高さを合わせ、底部に穿孔がある。76は壺下半部。底部は平底で、底部と胴部接合時の粘土巻き目が凹凸として残る。外面は縦方向ハケ目、内面は縦方向ケズリとナデで、底部付近に指圧痕が残る。

77は壺形土器の口縁部から頸部にかけての破片。素口縁で、外側に緩く外反する。外面はナデ、内面は縦方向にケズリ痕が残る。78、79は壺底部。78は小型壺底部とみられ、胴部への広がりは大きくなく、底部は薄く作る。79は胴部への開きが大きく、器壁は厚く作る。

SD-070 調査区東端で検出された土坑。東側は調査区外に及ぶため、遺構の規模、形態は詳らかではない。検出時で遺構面からの深さ60cm前後を測る。壁、床ともに凹凸が目立ち、複雑な形態を呈する。底部の形態からみて北東~南西方向に延びる溝の一部と見られる。

出土土器 (Fig.19) 遺構内から弥生土器が出土するが、小片が多い。80は壺形土器口縁部で、口縁上面が水平になり、外側に突出する。口縁内側への張り出しが大きい。

SD-071 (Fig.18) 調査区東側で検出された溝状遺構。主軸を北東~南西方向に向ける。全長4.7m、幅90cm前後で、検出時の深さ20cm前後を測る。西側は端部が丸くなり、溝中央部にかけてほぼ一定の幅で延び、東側で一段低くなっている。東側端部では幅25cm前後まで狭まる。断面形は逆台形に近く、床面は平坦面が多い。床面上に2箇所のピットがある。遺物は溝内部東側を中心して出土する。出土状況は上器小片が集積した状況を呈している。

出土遺物 (Fig.19) 81は小型の壺形土器で、口縁部は外側に短く突出し、口縁上面はやや内傾する。口縁内側への張り出しが見られない。82は口縁が外側に長く突き出す。口縁内側に鋭角に張り出す形をなす。口縁下に低い断面三角形突帯を貼付する。83は壺底部。平底で外底面に粘土接合痕による凹凸が見られる。内底面は丸く、底部付近の器壁を厚く作る。外面は縦方向ハケ目、内面はナデ。

SD-079 調査区東側で検出された溝状遺構で、北東~南西方向にほぼ直線的に向く。幅1~1.2m、深さ20cm。床面は大部分平面で、断面形は逆台形になる。床面上に凹みがあり、深さ15~20cmを測る。

出土遺物 (Fig.20・21) 遺構内からの遺物は大きめの破片が多い。93は壺形土器で完形に復元できる。口縁部は外側に短く突出し、口縁上面は平坦になる。胴部は上位に最大径が位置し、肩が張る。底部は平底になる。内外面とも風化が進み、調査は不明。94、95は壺口縁部。94は口縁上面が内傾し、口縁内側への張り出しがない。口縁下部に突帯を貼付する。95は口縁上面が水平で、口縁内側の小さな突出が見られる。96は壺底部で、平底形を呈する。97は短頭壺口縁部。口縁端部に穿孔がみられる。98は壺底部。99は高杯杯部下部で、対応する口縁部や脚部は出土していない。

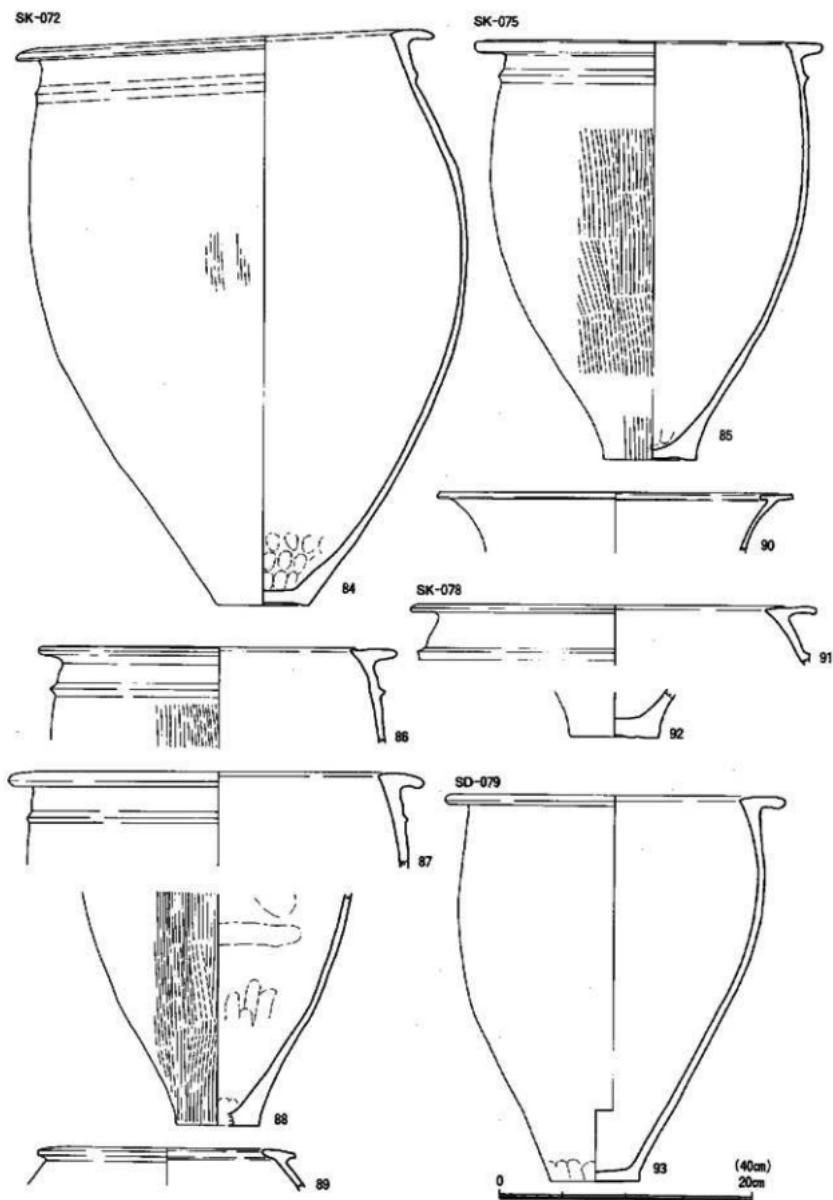


Fig. 20 B区出土遺物実測図2 (縮尺1/4・89・90は1/8)

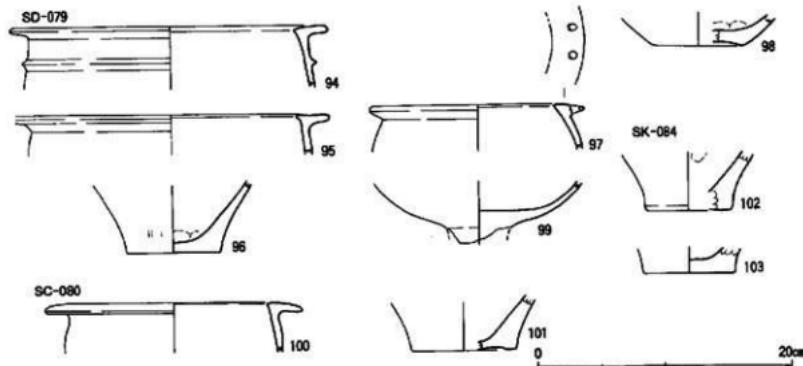


Fig. 21 B区出土遺物実測図3 (縮尺1/4)

### 第3節 繩文土器 (Fig. 22~25)

弥生時代の遺構を調査中、A区東側で縄文土器が多数確認されたため、弥生時代の遺構面の調査後に下層の掘り下げを行い、縄文包含層を確認することができた。縄文包含層は遺構面直下から~20cmまでの黄灰褐色シルト質で、鉄分、マンガン分を多く含む土質である。包含層下層との境界は土質的には不明瞭で、遺物包含層と近似する土質が下層まで堆積しているが、土器の出土状況はあるレベル以下で遺物が出土しなくなり、包含層の限界とみられる。土器、石器は主に層の上部で出土し、下層からの出土量は少ない。遺物分布範囲の中心部では出土遺物の密度が高く、周辺部で薄くなることから、包含層の堆積状況はレンズ状に薄く堆積しているものと考えられる。包含層の掘り下げ中、掘り下げ後にそれぞれ遺構の有無の確認を行ったが、下面での遺構は確認できなかった。このことと遺物の分布から見て下層の縄文時代の遺物は土砂の流れ込みによる自然堆積に伴うものと思われる。遺物の風化状況が進んでいないことから、隣接地点から移動してきたものとみられる。またB区でも同様に遺構面下層を一部掘り下げたが、B区では縄文時代の遺物は出土しなかった。

104~107は精製の浅鉢。いずれも口縁端部は上方に直立し、丸く作る。口縁端部外面は面をなし、篦描きの沈線を1条施文する。頸部は内側に屈曲して内湾し、頸部と胴部の境界で屈曲して胴部へ連続する。104、107は頸部と胴部の境界付近に篦描きの沈線を1条施文する。外面は横方向ヘラミガキ、内側はナデ仕上げているが、内面屈曲部分にヘラミガキ状の調整痕が残るものがあり、一見篦描き沈線文に見える。108は粗製の浅鉢口縁部と見られるが深鉢破片の可能性もある。内外面とも風化が進み、調整不明。109は精製の鉢。底部を欠くが丸底になると推定できる。体部は丸く作り、口縁は素口縁で直立し、内側に篦描き沈線を2条施文する。内外面とも横方向ヘラミガキ。胎土は前出の精製浅鉢と同一である。

110~112は精製の深鉢。110は口縁帶をもち、内湾気味に直立する。口縁帶に2条の篦描き沈線を施文する。頸部は外湾し、頸部と胴部の境界で屈曲する。頸部外面には上下両側から重弧文が施文される。上側から1重の円弧文、下側に2~3重の重弧文を施文し、中間に横方向の沈線文を1条施文し、最下部に篦描き沈線文を2条施文する。外面は横方向条痕文が残り、内面はナデ。111は口縁帶を短く直立させ、口縁上面に山形を作り出す。口縁帶外面に2条の篦描き沈線を施文する。頸部はゆ

るく外湾して上方で外反し、胴部との境界で屈曲する。頸部下端に2条の竪描き沈線文を施文する。外面は横方向板ナデ、内面はナデ。112は直立する口縁部に外湾する頸部が続く。口縁外面に1条の竪描き沈線を施文する。

113～126は粗製深鉢。113は口縁部が外反し、端部は横ナデで面を作る。頸部は緩く外反し、頸部と胴部の境界付近に2条の凹線文を施文する。外面は横方向条痕文、内面は横方向板ナデ。胎土はやや粗い。114はやや小型の深鉢で口縁部が直立し、端部外側に面を作る。外面の条痕文は斜方向に施文される。115は頸部が外反し、口縁端部に面を作りて外側にわずかに折り返す。頸部と胴部の境界は屈曲させる。内外面とも横方向板ナデ、116は口縁端部が外反し、端部は丸く仕上げる。口縁部に穿孔が施される。117～118は口縁部が直立し、端部が丸まるもの。118は口縁端部外面がわずかに凹み、外反するよう見え、117も口縁下でわずかに屈曲して外反する。外面は横方向条痕文、内面はナデ。119は口縁端部が内湾するもので、外面は横方向条痕文、内面は横方向板ナデ。120～122は口縁端部が直立して細く尖るもの。外面は横方向の条痕文、内面は横方向板ナデ。123は口縁端部を横ナデで面を作る。外面は条痕文、内面はナデで、胴部に穿孔あり。124は口縁が直立してわずかに外反し、細く尖る。外面の条痕文は縱横に走り、粗い。125は口縁端部を丸く作り、胴部は全体に緩く外反する。126は端部を丸めてやや外反させる。外面は条痕文、内面はナデ。

127、128は底部破片。いずれも平底で、底部端は外側に張り出さず直立し、屈曲して胴部につながる。内外面ともナデ。他に出土した底部破片も図示した形態に類似し、底部端が外に張り出す個体はない。

129は手捏ね土器。胎土は他の繩文土器と同様で、全体に指圧痕が残る。

#### 第4節 出土石器 (Fig. 26～29)

前章の繩文遺物包含層及び各遺構内から繩文、弥生各時代の石器が出土している。この節では調査全体を通じて出土した石器を一括して報告する。特に記述のない限り繩文包含層からの出土である。

130～137は打製石器。130～132は小型で、130は安山岩製で基部の抉りは浅く、刃部の加工も簡単なものである。131は黒曜石製で、先端部が鈍角になり両側に刃部を作る。脚部が欠けている可能性がある。132は黒曜石製で側縁の一部を欠く。基部の抉りは小さく、脚端部も尖らない。全体に板状を呈する。133は黒曜石製で全体に細かい剥離を行って成形しており、側縁は鋸歯状に作り、直線的になる。脚部は長く、基部の抉りも深い。全体に整ったレンズ形を呈する。134は安山岩製で主剥離面が残る。側縁は鋸歯状に作り、直線的になる。脚端部は尖り、基部の抉りは深くなる。135は黒曜石製で全体に丸みをもつ。両側縁は鋸歯状に作る。136は黒曜石製で両縁が直線的に鋸歯状になり、両脚を欠き、欠いた部分を丸く整形する。137は安山岩製で全体に組め。両側縁は粗く鋸歯状に作り、全体に厚く作る。

138～143は石器未製品。138は黒曜石製で表面にのみ剥離整形を行っており、裏面は主剥離痕が残る。全体に丸みをもち、側縁の一部に刃部を加工している。139は黒曜石製で全体に三角形に近い形を呈し、表面に剥離痕が残る。裏面側縁先端部付近に刃部を作り出した痕跡がある。140は黒曜石製で基部に抉りを作り出した段階の未製品で、表面に自然面が残る。裏面は主剥離面が残り、断面は三角形を呈する。141は黒曜石製で片方の側縁に刃部を作り出している。裏面は主剥離面が残る。142は黒曜石で片方の側縁に自然面が残り、裏面は主剥離面が残る。細かい剥離整形痕はない。143は黒曜石製で先端部を欠く。脚部は尖り、抉りが深い。刃部は一部作り出しが、表面に自然面が大きく残る。裏面は主剥離面が残る。

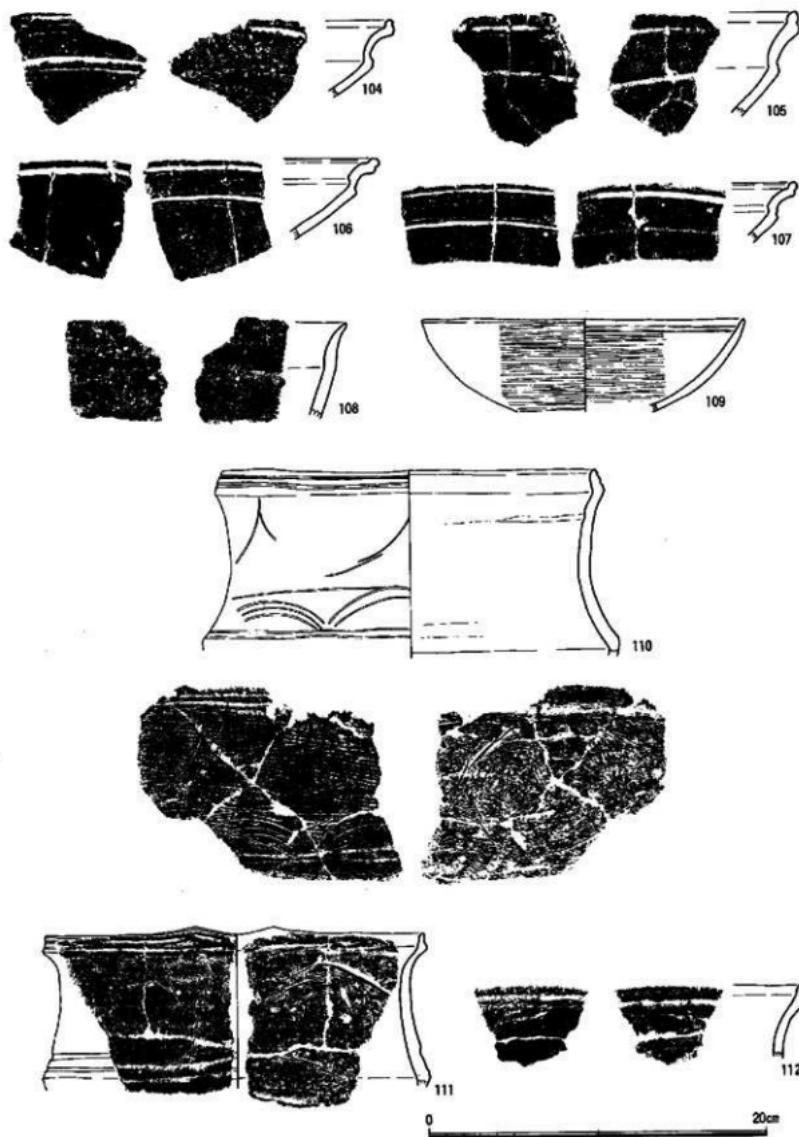


Fig. 22 A区出土縄文土器実測図 1 (縮尺 1 / 3)

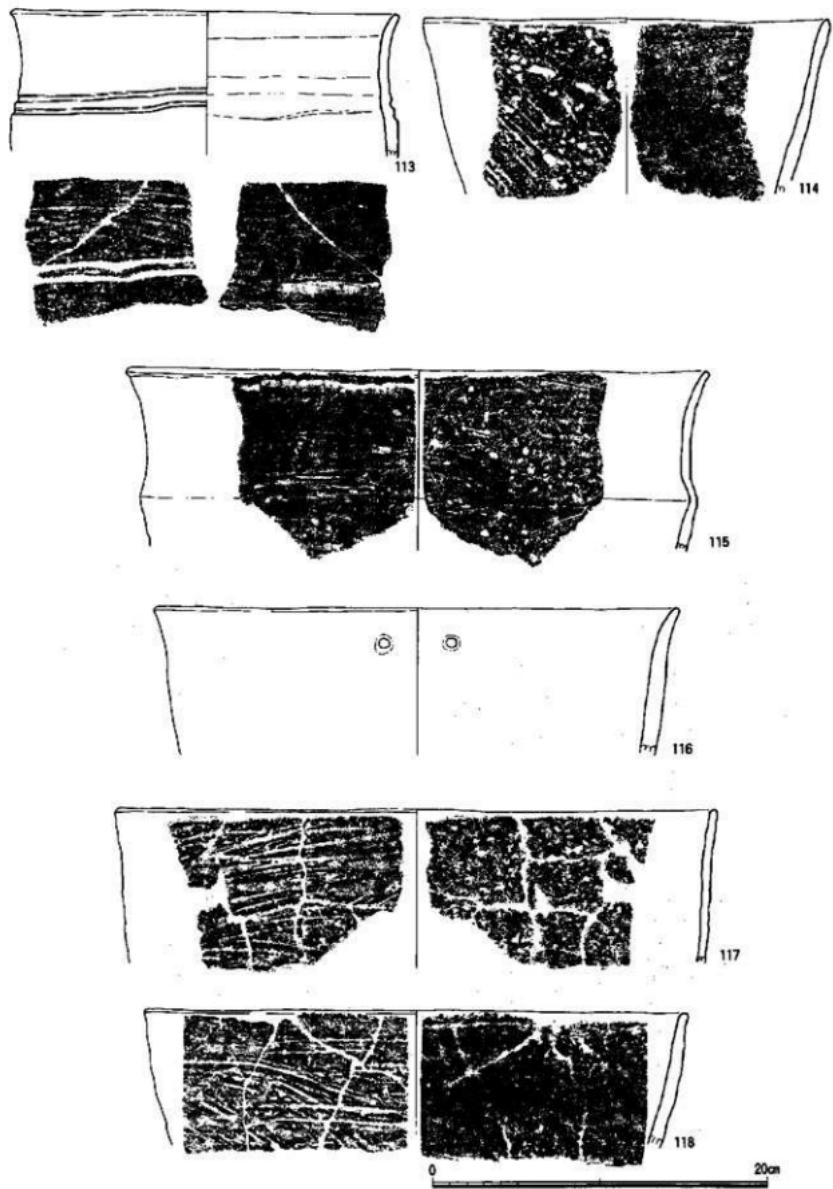
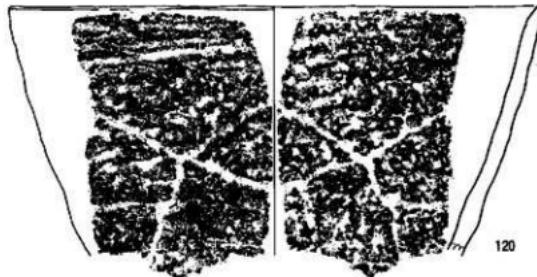


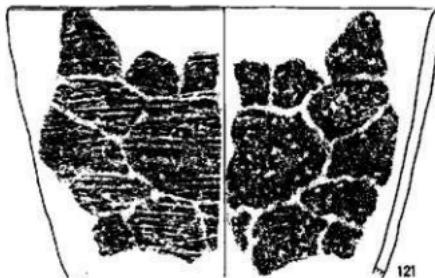
Fig.23 A区出土繩文土器実測図2 (縮尺1/3)



119



120



121



122



123

0 20cm

Fig. 24 A区出土縄文土器実測図 3 (縮尺 1/3)

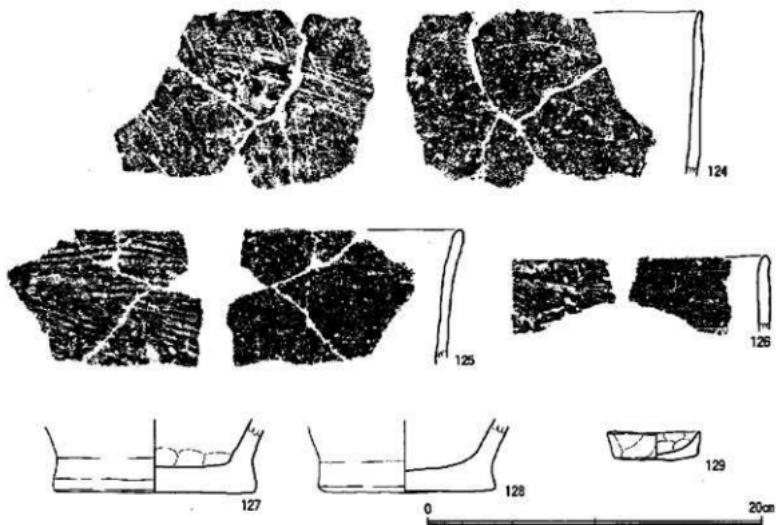


Fig. 25 A区出土縄文土器実測図4 (縮尺1/3)

144は黒曜石製楔形石器で、半分を欠く。上下両側からの剥離の他、側縁からの剥離も見られる。145、146は石錐で、145は黒曜石製で先端部に細かい剥離を施して成形する。摘み部裏面は主剥離痕が残る。146は黒曜石製で先端部が細長く鋭く作られ、細かい剥離で整形する。147は石匙で、安山岩製。表裏面とも主剥離面が残り、摘み部と刃部に細かい剥離を施す。

148は安山岩製のスクレイパーで側縁に刃部を作り出す。裏面は主剥離痕が残る。149は安山岩製のスクレイパーとみられるもので、側縁側から全体に剥離を入れ、側縁の一部に刃部を作る。150は安山岩製で全体に板状を呈し、片方の側縁に刃部を作り出す。他の側縁は面をなす。

151、152は黒曜石製石核。151は角錐形で、縱方向の剥離が見られる。152は角柱形で上下両方向からの剥離が見られる。

153は安山岩製の石鎌とみられる。刃部は内側と外側の両方に作られ、断面はレンズ状になる。154は安山岩製の打製石斧。先端部幅が広く、中頸にくびれを作り出す。刃部は先端部に細かい剥離を行う。表裏面とも主剥離面を残し、全体に板状で偏平な形状を呈する。155は安山岩製打製石斧。側縁全周に剥離を施して整形しており、レンズ形を呈するが、剥離が粗い箇所がある。

156～159は叩石。156～157は側面に叩痕が残り、158は両端部に叩痕が残る。159は側面の2箇所に叩痕が残る。以上4個は全てSD-069出土。

160、161は磨製石斧。160は太形蛤刃石斧で両端に剥離痕が見られる。SD-037出土。161は刃部を欠くが、本来は刃部が幅広の石斧であったと見られる。全体に板状を呈し、表面の風化が著しい。A区ピット出土。162は扁平片刃石斧。刃部のみ遺存し、表面は平滑に研磨されていて縱方向の擦痕が残る。滑石製で、B区ピット出土。

163は石錐とみられる。全体に板状で、平面形は両端に凹みをもった鉄アレイ形になり、側面は段が付く。表面に擦痕が残る。164は磨製石錐か磨製石剣の切先と考えられるもので、先端部と基部を欠く。粘板岩製。165、166は石包丁で、165はSD-069出土。166はB区ピット出土で、大型であったとみられる。167は紡錘車。B区柱穴から出土。

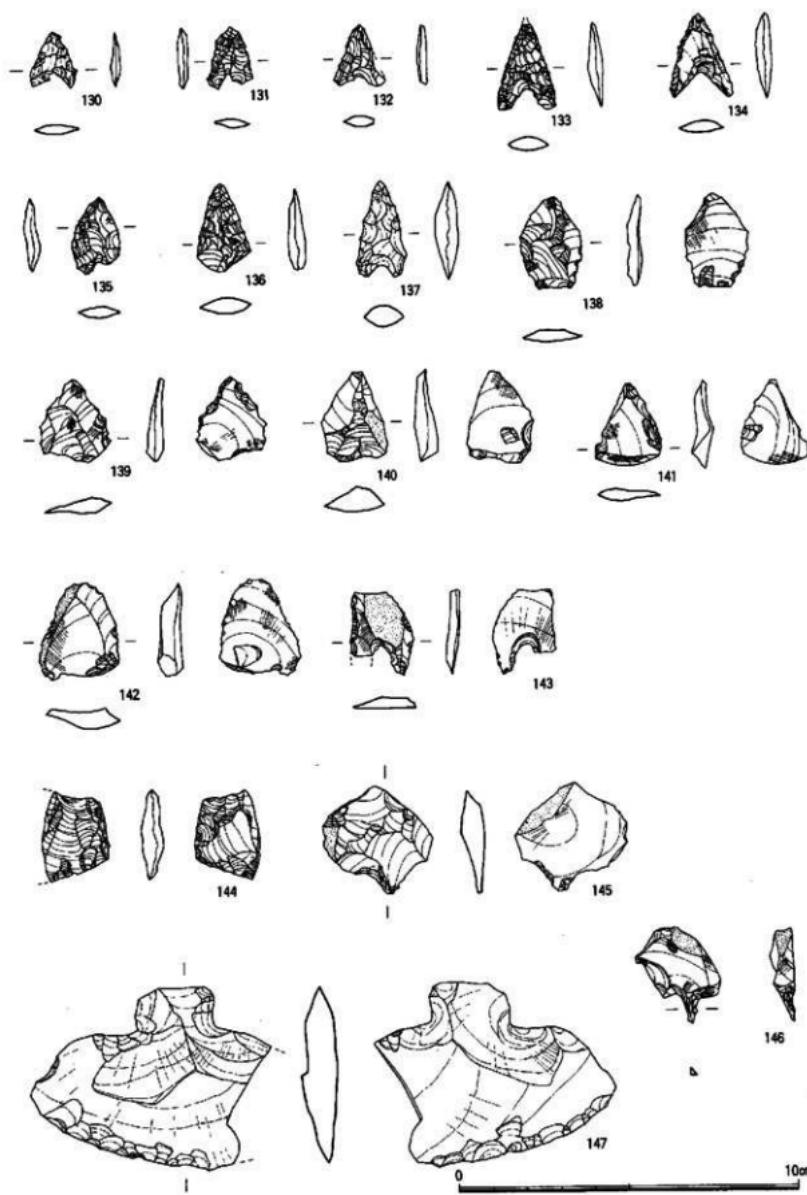
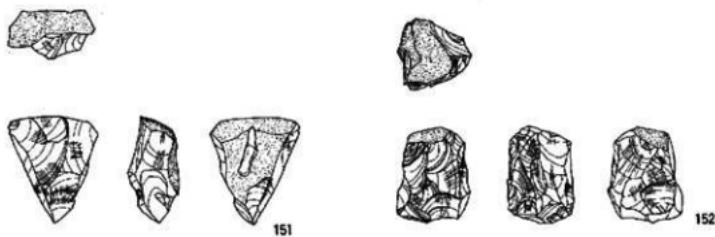
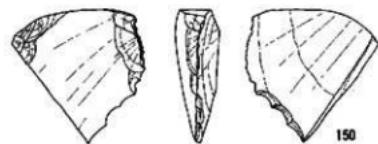
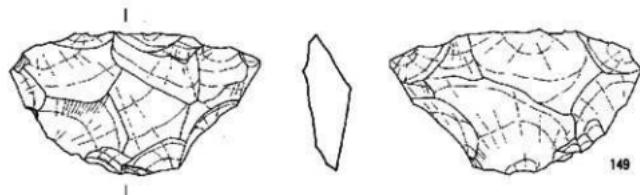
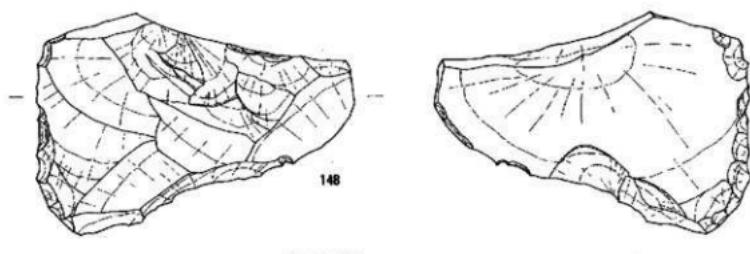


Fig. 26 出土石器実測図 1 (縮尺 2 / 3)



0 10cm

Fig. 27 出土石器実測図 2 (縮尺 2 / 3)

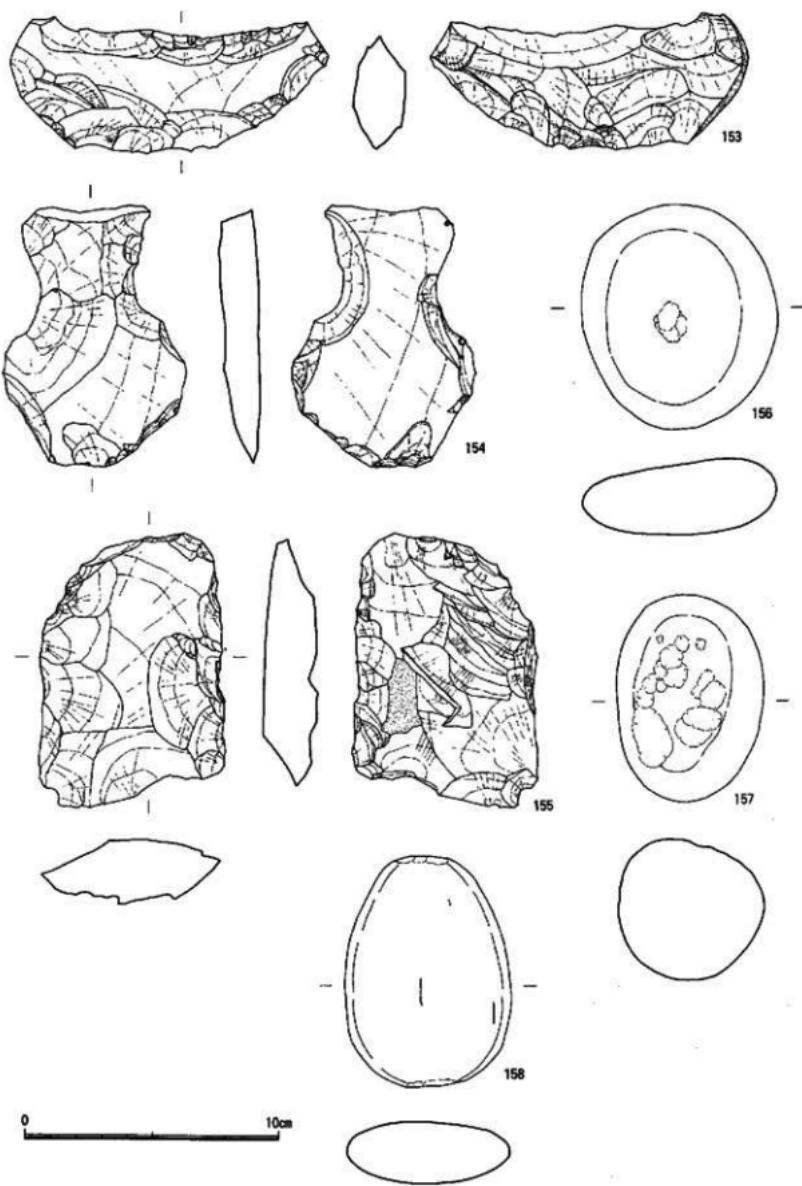


Fig. 28 出土石器実測図 3 (縮尺 1/2)

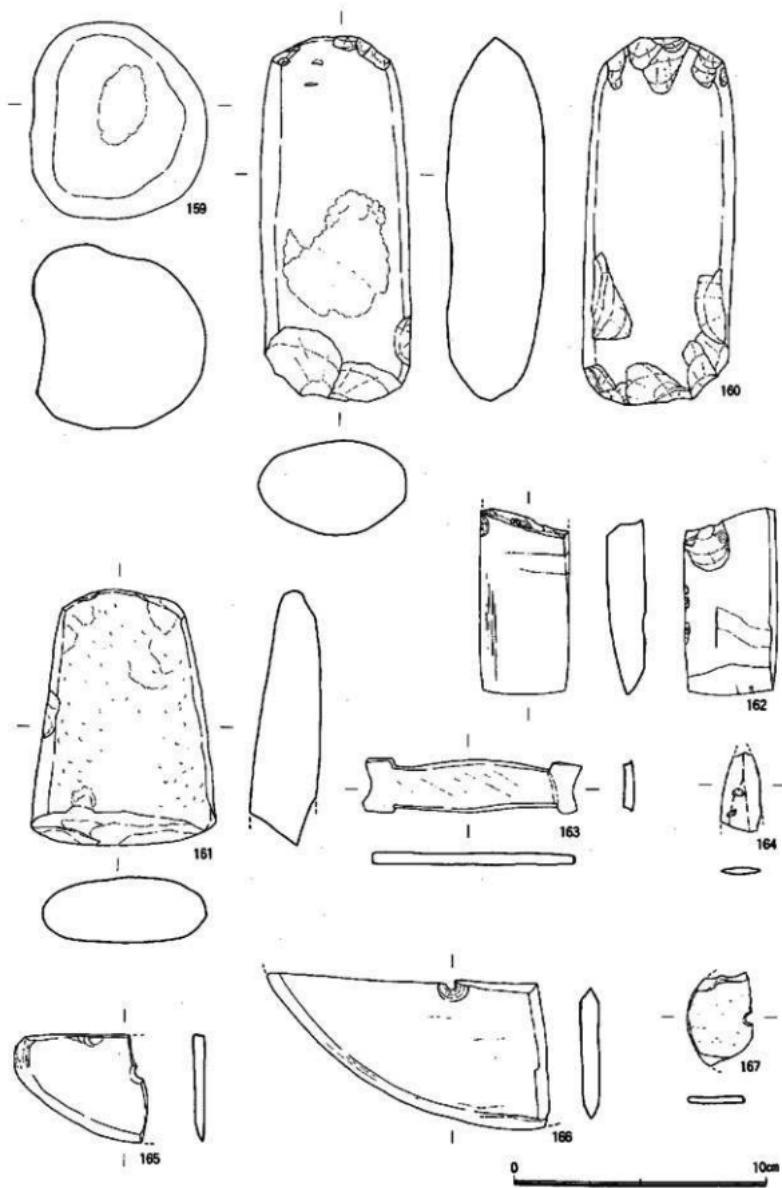


Fig.29 出土石器実測図 4 (縮尺 1/2)

## 第4章 周船寺遺跡群第11次調査総括

1. 壺棺墓について 本次調査区内では壺棺墓は可能性のあるものも含め4基検出された。時期的には弥生前期末～中期初頭にかけての壺棺が2基、中期後半の壺棺が2基で、いずれも小型棺である。また出土地点はA区に限られ、北側のB区では出土していない。したがって壺棺墓を含めた墓域範囲は南側に限定されるところが適当であろう。

近隣の調査区では、本次調査区の北西側に隣接する第8次調査で弥生時代前期末の壺棺墓（大型棺3、小型棺1）が出土しており、また南側の第6次調査で8基の弥生時代前期後半の壺棺墓が出土している。その中で、今回の調査での4基の出土は数としては多い方ではない。特に前期末～中期初頭の2基の壺棺墓が残りが悪く、距離をおいて出土している様相は、墓域の周辺部あるいは中間空白地帯的な様相を示しているとみることもできる。ただ、前期後半～末の時期の壺棺墓の墓域構成は弥生中期の壺棺墓群と比較して壺棺墓の分布が散漫になる場合があり、本次調査の出土状況から即座に本調査地点が壺棺墓群全体に対して周辺部と位置付けることは適当ではない。

弥生中期後半の壺棺墓2基については遺存状況が良く、また2基が近接して埋葬されている。この状況から近接地に弥生中期の壺棺墓あるいは墓葬に関する遺構・遺物は検出されていない。従って壺棺墓群が以前の調査区外に小規模に存在している可能性が考えられる。具体的にはA区西側から南西側の地区が土坑、ピットの出土状況からみて壺棺墓群が存在する可能性が最も高いであろう。

### 2. 溝状遺構について A、B両区の溝状遺構は溝の方向から大きく3種類に分類可能である。

1 北西～南東方向に延びる溝。SD-036、037、038、039、059、063、064、069等が挙げられる。幅が広く深いものが多く、出土する遺物の量も多い。遺物の時期は弥生中期中頃～後半が主である。いずれの溝もほぼ同方向に平行しており、A、B両区間でつながって1本になる可能性のある溝もあり、その場合単なる区画溝の規模を超えた性格をもつ溝と捉える必要がある。

2 北東～南西に延びる溝。SD-065、071、079等、主にB区東側で検出されている溝はこの種類に該当する。溝の幅、深さとも狭く、長さの短いものもある。遺物は比較的多く出土し、時期は弥生中期後半に限られる。この種類の溝もほぼ同方向に平行しており、1～2m間隔で近接して走っているのが特徴である。溝の性格として、祭祀溝の一種であると考えられる。

3 南北方向に延びる溝。B区のSD-051、052の2本がこれにあたる。溝形態は幅が狭く、深さも浅い。弥生時代中期初頭の遺物が出土しており、この時期に属すると考えられるが、出土遺物の大半が小片化する。遺構の性格は不明で、祭祀溝の他、区画溝の可能性もある。

これらの溝状遺構と類似する遺構の近接する調査地点での検出状況をみてみると、南側の第6次調査では報告されている遺構中に細長い溝状の土坑があり、弥生中期後半の遺物を出土し、量も多いことからこれらの土坑が上の1、2の溝と同類のものとみられる。北西側の第8次調査ではSD-13、14の2本の溝状遺構が出土しており、形態、方向から上の2の類型の溝にあたると考えられる。これよりこの種の溝が広い範囲にわたって掘削された遺構群を構成する要素として位置付けられ、このことを踏まえて遺構の性質、この地区的遺跡の全体像を論じる必要がある。

周船寺遺跡群の調査報告書はこれまでに以下のものが刊行されている。

「千葉シナマ遺跡発掘調査概報」福岡市埋蔵文化財調査報告書第60集 1980

「千葉シナマ遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第88集 1982

「周船寺遺跡群 国道20号線今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書」福岡市埋蔵文化財調査報告書第429集 1995

「周船寺遺跡群 2～3次調査の結果」福岡市埋蔵文化財調査報告書第493集 1996

「JR筑肥線高架化地内遺跡埋蔵文化財調査報告書」福岡市埋蔵文化財調査報告書第654集 2000

他、各年度の「福岡市埋蔵文化財年報」で各調査の概要を報告している。



1 A区西半分部分（北から）



2 A区東半分部分（北から）



3 ST-026（北から）

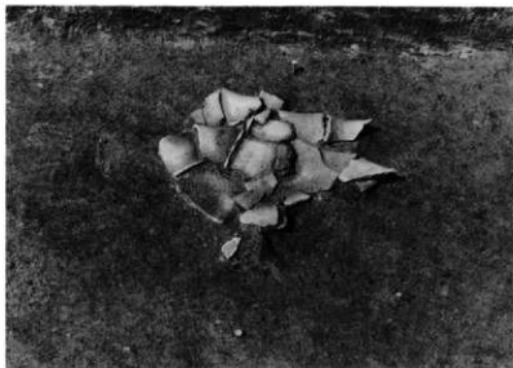
図版 2



1 ST-027 (東から)



2 ST-032 (西から)



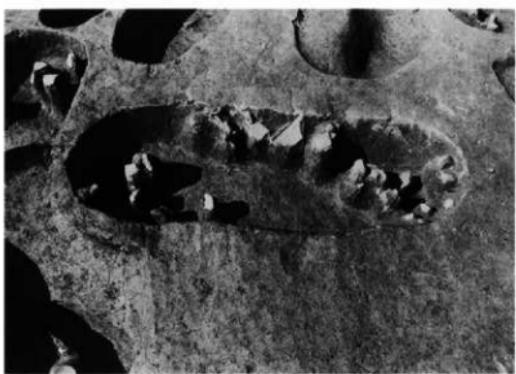
3 ST-050 (南から)



1 SC-002 (西から)



2 SK-012 (北西から)



3 SK-031 (南東から)

図版 4



1 SD-036遺物出土状況（南から）



2 SD-038遺物出土状況（北から）



3 B区全景（東から）



1 B区全景（北西から）



2 SC-058（北から）



3 SC-080（北から）

図版 6



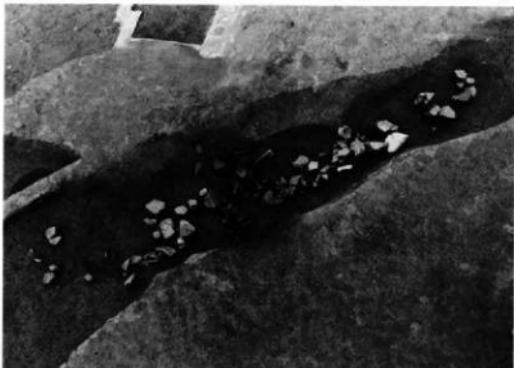
1 SK-072 (北西から)



2 SD-051遺物出土状況 (北東から)



3 SD-063遺物出土状況 (南東から)



1 SD-064遺物出土状況（東から）

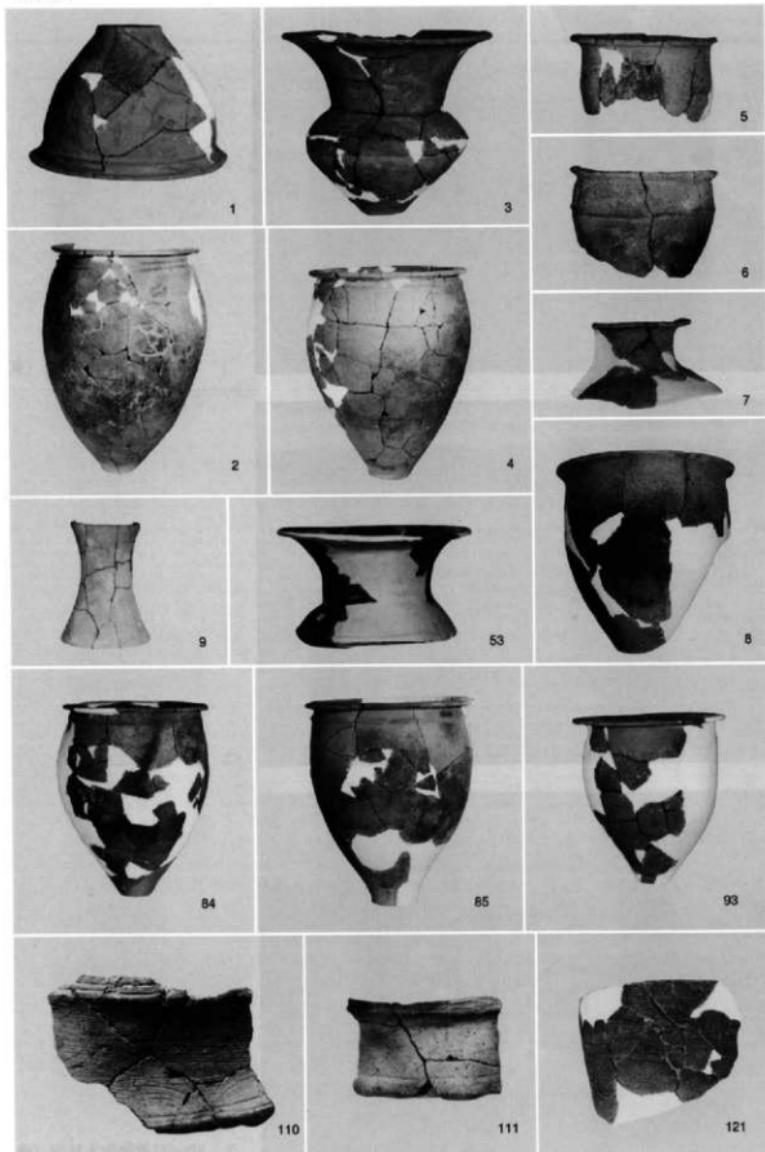


2 SD-069（北から）



3 SD-071遺物出土状況（南から）

圖版 8



出土遺物

---

## 周船寺遺跡群3

福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第655集

2000. 3. 31

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 (株)博多印刷  
福岡市博多区須崎町8-5

---